
封印聖女

檜高 黎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

封印聖女

【Nコード】

N0430Y

【作者名】

檜高 黎

【あらすじ】

青年は、居合大会に軽々と優勝する程の剣の才能を秘めているが逸脱しすぎて、周囲からは理解される事はない。

心に深い闇を宿していた。
大会からの帰路、不慮の事故に遭い、気が付けば深い森の中に倒れていた。

そこで遭遇する驚愕の事実、刃を通して共感できる相手を見つける。しかしそれは彼にとってこれから先に起こる出来事の序章でしかなかった。

序章・起源（前書き）

感想、指摘など、気軽にご意見頂ければありがたいです。

この物語はフィクションであり、作者自身、初めて書く作品ですの
で読んで下さる皆さんの意見をお聞かせ下さい。厳しい指摘も歓迎
しております。

序章 - 起源

時は戦国時代 - - - - -

『一本の刀に纏わる奇聞』

要塞と化した建物は、周囲を甲冑を着込んだ集団に包囲されていた。

その集団の中に一際、身分の高そうな人物がいた。

「ちっ！信長め、手間取らせてくれる！この際、刀は後でかまわん。まずは信長を炙り出せ！討ち取ってからでも、問題なかるう。疾う疾うに火を放て！」

指揮官の合図により全軍一斉に火が点いた弓を構える。

「全軍用意っ、放て！！」

指揮官の支持に従い、家臣達は一斉に弓矢を解き放つ。弓は弧を描き、寺へと突き刺さると一斉に燃え上り、炎上する。

燃え盛る火の海で舞うように戦う人物がいる。周囲は朱色に染められ、人物の影と映し出される光景はあたかも、一枚の絵画の様だ。白い着物を身に着けて戦う人物は、襲い掛かる敵をひらりっとかわしては手に持つ刀で一刀の元に葬り去る。刀は複数の斬撃を受け刃こぼれしていた。

「御館様、もう此処は駄目で御座います。せめて御館様だけでも落ち延びて下さい」

女性の様な風貌の小姓が言った。

「蘭丸、楽しいよのう、この信長今宵程高揚した日はないぞ！」
振り返り楽しそうに笑みを浮かべ起つ人物の着物は、所々朱色に染まっていた。

「光秀が謀反を起こす事は、当に解っておつたが、まさか今宵だとはなあ、露にもおもわなんだ！人生何が起こるか分からぬ処が実に愉快よのう」

白い着物を纏つた人物は、刀を床に突き立てると、小姓の言葉や周囲の状況など気にも留めず力強く両手を叩くと、奥の襖から一人の武士らしき人物が姿を現した。

「安達六郎あだちろくろうひめただ姫忠是に」

「姫忠、この刀を持って逃げる。決して光秀や家康に奪われる様な事は遭つてはならぬ！よいな！！」

眼光鋭い眼差しで、安達六郎姫忠を見つめると、床から刀引き抜き六郎に託した。六郎は命令に従いその場を後に裏口から包囲された外へ足早に出て行つた。

安堵の表情を浮かべ、白い着物を着た人物は、小姓に言い放つ。

「蘭丸、鼓を持てい！この信場、最後の舞を舞おうぞ、地獄に往くには少々辛気臭い、人間死する時でも華やかでなくてはいかぬ！」
小姓は今にも溢れそうな涙を堪えながら「御館様のお好きな敦盛で宜しいでしょうか・・・」

その言葉に満足気に相槌すると、火の海に囲まれた庭にくるりと顔を向け、扇子を片手に唄いだした。

小姓の手により鼓から音が響き渡る。

「人間五十年、下天の内をくらぶれば、夢幻のごとくなり」
一度生を得て滅せぬ者はあるべきか」

舞を舞い終えた白い着物を着た人物は、小姓に向かい見せたこと無い貌で微笑む。

「蘭丸、好い鼓を奏である。今宵、生涯で極上の舞を舞えた事にこの信長、心底満足しておる」

小姓の瞳から堪らず涙が雫となって頬を伝わり落ちる。

「勿体無き、お言葉、恐悦至極に御座います・・・」

静かに小姓に近づき、膝を下ろすと微笑し、遺言を告げる。

「蘭丸、儂の亡骸を誰の眼にも晒す事は決して罷り（まかり）ならん。よいな？」

そう告げると、小姓の腰帯びに結び付けてある短刀を引き抜き、燃え盛る庭園に堂々と起ち、腰を下ろし胡坐あぐらをかくと着物の襟を両の手で開き、短刀を腹部に突き刺した。

「ぐう！・・・まだまだ、これしきでは、死ねぬよなあ」

愉しそくに貌を歪ませ、再度腹部に向かい短刀を振り下ろすと真横に掻つ捌く（かつさばく）。

四度程繰り返し、ようやく着物の主は微動だにしなくなった。

天を仰ぐように燃え盛る火の海の中、小姓は主に近づくと帯刀している太刀を主に向かい振り下ろした。

「御館様つ御免仕る！」

小姓は四肢を切り裂くと、主の手から取った短刀で跡形もなく千々に裂いた。そして一番火の勢いがある場所に主の遺体を大事そうに据えると自らも短刀を片手に自刃した。

その頃、御館様の命により、六郎は裏口から刀と風呂敷を携え逃走を試みていた、もう三十人は斬っただろうか？いずれにせよこのままではいつか捕まると観念した姫忠は、本来の姿に戻る事を決意する。

安達六郎姫忠と言う人物は本来の姿は、女だったのだ。

「御館様申し訳御座いません、この姫忠。御館様に拾われ、育てて頂きましたが御館様の刀と血筋を守る為に女に戻る事をどうかお許し下さい」

茂みに隠れ風呂敷を広げると素早く着物に着替える。姫忠は般若のお面を着けると刀片手に敵を迎え撃つ。

数人の武者に囲まれた姫忠は一人、また一人と一刀の元に葬り去る。血に塗れた姿で舞うように踊ると武者に向かい言い放った。

「わらわは、鬼女おにめじゃ！食われない者はかかってまいれ！今宵は喉が渴いて堪らぬ、もっと鮮血をわらわに飲ませたもう・・・」

得たいの知れない恐怖は次第に武者達に感染してゆき、武者達は我先に逃げ出した。

そして、残された姫忠は刀と共に何処いどこに姿を眩ました。

一五八二年。世に言う『本能寺の変であった』

落雷（前書き）

感想、指摘など、気軽にご意見頂ければありがたいです。

この物語はフィクションであり、作者自身、初めて書く作品ですの
で読んで下さる皆さんの意見をお聞かせ下さい。厳しい指摘も歓迎
しております。

落雷

『本能寺の変』から四百と三十年の時が過ぎた - 現代

居合大会に出場する為、彼は京都に居た。3日に亘る競技を無事に終了し、彼の優勝で大会の幕は閉じた。

取材を適当に済ませた彼は、会場を後にする。

会場を出ると、紅葉が真赤に染上がっていた。移り行く季節の感動も、彼の眼には空虚に染まっていた。

幼い頃から感じていた違和感。彼の現実には、虚像の様な空虚な世界だった。

ガランドウの世界。

彼は特殊な分野において、天賦の才を持っていた。他人と比較すると、剣を扱う才能は圧倒的な程、逸脱していた。

「天才か・・・」

会場を出た彼は、宿泊しているホテルへと静かに歩み出した。薄暗くなった空。ビルと言う森に囲まれた街をひたすら歩く。

雑踏の中、淡々と歩く。時折すれ違う恋人達や、友人同士だろうか。目抜き通りを楽しそうに歩く人達の姿は、彼には別世界の人間に見える。

突然、薄暗くなった空から雷鳴が鳴り、雨が降り出す。先程まで楽しそうに歩いていた、彼等も急ぎ飲食店や閉店した店の軒先に避難する。

しかし、彼だけは違った。雷鳴や雨等、気にも止めず淡々とホテルへ向かう。

「雨か・・・」

独り言を呟き、ホテルまでの道をただひたすら歩く姿は、周囲には異質な者に見えただろう。

周囲の目など気に留めず、歩く彼は、やがてビルと言う大木が群

生ずる、目抜き通りで一番大きな交差点に差し掛る。

歩行者信号は赤で彼は、歩みを止めざる得ない。

周囲には傘を差した人が数人いる程度だ。

当然、彼は滝に打たれたかのように濡れだった。雨で学生服は水気を帯び、肌に張り付いている。少し長めの漆黒の髪からは水滴がこぼれ落ちていた。

そんな彼の姿を見てか、一人の若いOLが後ろから話し掛けて来た。

「ねえ君、傘くらい差さないと風邪を引くわ」

その優しそうな声に彼は振り返った。そして・・・

「構いません、雨に打たれたい気分なんです。そんな時も貴女にもあるでしょう?」

きつと本当に心配してくれてるのだと彼は分かっていた。だからこそ遭えて疑問で投げ返したのだ。

普通なら相手のOLも好い気はしなかっただろう。だが振り返り、言葉を発した彼を見たOLは思わず見惚れてしまったのだ。

切れ長で二重の瞳、スツと通った鼻筋、少し厚めのやらかそうなの下唇をした端正な顔立ちに。

OLが見惚れて呆^{ぼう}としてる間に、信号は青に変わっていた。突然雷鳴が轟くと、OLは我に返った。

「そうね・・・そんな日もあるわね」

頬を薄いピンクに染めて、足早に横断歩道を走り去っていった。

何事も無かった様に横断歩道を彼は歩きました。

横断歩道の中央部分に差し掛かった頃、信号は青から赤へ変わりはだしていた。

点滅する信号と共に雷鳴が響く、まるで共鳴するかの様に。

まるで、何かのスクランブルの様に。

誰かを待つて居た様に・・・雷鳴は咆哮を挙げた。

ツガアンンンンンン!!!

空から落ちた蒼き落雷は、彼の姿を閃光の彼方に一瞬にして覆い

隠した。

眩い程の閃光に人々は一瞬にして、視界を奪われた。

人々が視界を取り戻す頃、雨は止んでいた。

視界を取り戻した人達は、驚きを隠せないでいた。

店の軒下から見ていた、中年のサラリーマン風の男性が声を荒げた。

「おい！人が落雷に撃たれたぞ！俺は救護に行くから、誰か救急車を呼んでくれ！」

男性が、急いで落雷が落ちた場所へ歩みを進める。アスファルトが焼け焦げる匂いと煙で、周囲はよく見えなかった。

アスファルトは熱を帯び、靴を履いている状態でも熱を感じる事ができた。

ハンカチで口の周りを当てた男性は、何とか落雷の落下した場所へとたどり着いた。

「！！！！！」

「確かに落雷が人に落ちたはずだ！何で誰も居ないんだよ！！！」

男性は、その場に呆然と立ち尽くした。程なくして救急車、警察が到着し、辺りは野次馬で騒然としていた。

その場で警察により現場検証と目撃者の事情聴取も行われた。

目撃証言も多数あり、警察も手を焼いているのが現状だった。

この落雷の事故は、各種マスメディアに取り上げられ、翌日の朝TOPニュースとして流される事となった。

警察の記者会見では、少年らしき人物が、落雷に打たれた事は目撃証言からも紛れも無い事実であると言う見解であり、激しい落雷により、全てが蒸発したと報道された。

剣戟（前書き）

感想、指摘など、気軽にご意見頂ければありがたいです。

この物語はフィクションであり、作者自身、初めて書く作品ですの
で読んで下さる皆さんの意見をお聞かせ下さい。厳しい指摘も歓迎
しております。

剣戟

気が付けば彼は鬱蒼とした森の中にうつ伏せに倒れこんでいた、彼は周りを見渡す、周囲には人の気配は全く無い様だった。

「此処は・・・何処だ・・・？」

何が起きたのか分からなかった。懸命に記憶を手繰り寄せる、居合大会からの帰り道、ホテル向かって歩いてたはず・・・

「そうだ。目抜き通りの交差点で、確か雨が降ってた・・・今まで感じたことのない衝撃が体に走ったのは憶えてる」

雷にでも打たれたのだろうか？あの時、雷鳴が鳴ってたから。少し指先を曲げる、指は動く様だ、次は体を起こしてみた、両の手のひらを何度かひらいては握ってみる。特に異常はない様だった。

「指先や腕に異常がなかったのは良かった・・・」
深緑の隙間から木漏れ日が漏れている、鳥の泣き声が耳に届いてきた。

「都会の喧騒とは大分違うけど、こっちの方がいい・・・」
彼は少しの間、この雰囲気を感じていた。自分でも可笑しかった。事態がわからない状況の中で、心はこんなにも落ち着いてい
たからだ。

暫くすると、近くで馬の走る音が聞こえてきた。

トトツトトツトトツトト

「全員、止まれ！」

体躯のいい、全身鎧姿の男が叫ぶ。

次の瞬間、複数の馬に乗った兵士達に取り囲まれる、体躯のいい全身鎧姿の人物が話し掛けてきた。

「貴殿は何者か？何処から来た？見慣れない服装だが、身分を明かしてもらおうか。場合によっては捕縛する事になるが、正直に身分を明かしたほうが身のためぞ」

何が起きてるのか理解できなかった。突然現れた甲冑姿の男達、

皆一様に手に武器を持っていて、兜を被ってるので顔は確認できない、その事がかえって、不気味だった。

「何か用ですか？」

一瞬にしてその場の雰囲気張り詰める、どうやら怒りを買ってしまったみたいだ。

「貴殿は、我らを愚弄してるのか？聞いているのはこちらだがな。それとも貴殿は、此処を何処か知らぬのか？」

どうやら体躯のいい男が、この隊の指揮官である事、これが映画の撮影なんかではない事は把握できた、怒りを買う事を承知で相手側に問いただした。

「此処は・・・何処なんですか？」

その場にいた指揮官以外の兵士は酷く激高し、馬から降り武器に手を掛けた。

「本当に分からないんです！此処が何処か知ってるなら教えて下さい」

指揮官は言葉を放った。

「此処はな、ブリテン国の王。アーサー王の領地だ」

「アーサー王？」

「そうだ、よもや知らんわけではあるまい？ブリテンに住んでる者ならば知らぬ者はおらんぞ」

「今、俺に分かるのは、此処が元いた俺の世界ではない事だけです」

指揮官は少し思案してるようだった。

「ならば、貴殿は異界の者か？」

「恐らくそうなると思います、落雷で打たれて、気が付いたらこの場所にいたんです」

「そうか。貴殿も武器らしき物を携えてるようだが、異界の者ならば、遠慮はいらぬな」

指揮官は、2人の兵に合図を出す、すると剣を持つ騎士と槍を持つ騎士が、馬上から降りた。地に足を付けた騎士達は臨戦態勢に入

った。

「まさか・・・」

「そのまさかだ、試させて貰うぞ。」

彼は焦った、刀は手元にあるが居合袋の中入ってる。刀を取り出してる時間はない。何とかして刀を取り出す時間を稼がないと考えると、剣士が切り込んで来た。片手で剣士の手元をpushさえ込み素早く足元を払いのける、剣士は倒れこみ転がる、その間に袋から素早く刀を取り出す。

指揮官は、一瞬驚き、笑った様に見えた。

「本当にやるんですか・・・」

「無論だ、生死は貴殿次第だがな」

その言葉に、彼の中に熱い物が込み上げてきたのが分かった。今まで真剣での稽古もしたが、唯の一度も高揚した事が無かったからだ。これが本当の命のやり取りだと想像しただけで、彼は興奮を抑え切れそうに無かった。

次の瞬間、体勢を立て直した先程の剣士の一人が、上段から斬り突けて来る。彼は瞬時に抜刀し、剣士の刃を右に避け、刀の物打ちでpushさえ込んだ。瞬間、背中にゾクツと悪寒が走る。

後方に居た槍兵が、突きを繰り出していた、体が瞬時に反応する。槍兵の突きを鞘で軌道を受け流す。

槍の先端は的を逸れ、大地に沈む。

彼の動きを見て兵士達は呆然としていた、目の前の出来事に驚いてる様だった。

「今のは手加減しましたけど場合によっては・・・斬ります」

その言葉に指揮官の目の色が変わったように感じた。

「さすが異界の者。そんな戦い方は今まで見た事も聞いたこともない、我が精鋭をこつても簡単にあしらうとは見事な腕だ。お前達は下がってなさい、私が直接相手をする」

指揮官は、大地に沈んだ槍を抜くと、素早く臨戦態勢に入った、そして冷めた声で言い放つ。

「その腕前、殺すには惜しいが、湖の騎士ランスロットが貰い受ける！」

彼の体に今まで感じた事の無い緊張感が疾走する、本能が危険を知らせている様だ、同時に今まで感じたことの無い高揚感が溢れてくる。

「本気で殺しに来ないと・・・貴方が死にます」

一瞬で場の空気が冷たく重く張り詰めた。互いに間合いを取って動かない、どれ程時間が経っただろうか、長くも無く、短くも無い、近くで鳥が飛び立つ音がした。

その瞬間、ランスロットが喉元を目掛けて突いてきた、瞬時に刀で槍を左へと受け流す。刀と槍から凄まじい金属音がこだまする。彼は心の中で呟く。

「なんて重い突きだ・・・受け流すのが精一杯だった」

一方ランスロットはと言うと、素早く体勢を立て直し、彼に向けては呟く。

「本気で突いたんだがな・・・まさか防がれるとは。異界から来たと言うのは、虚言でない様だ」

彼の本能は、先程より強く、この人は危険だと警告している。

本気で掛からないと死ぬのは自分だと、彼は覚悟を決めた。

「今まで本気で抜いた事ないんですけど、本気でいきます」

彼は刀を鞘に納める。

「どうした？臆したか」

「違いますよ、この技でないと貴方には敵いそうにない」

「それは、お褒めに預かり光栄だ。だが剣を鞘に収めた状態で繰り出す剣戟等聞いたこともないか？」

「そうですね、貴方の言う異界の技ですから」

彼は爽やかに笑う、そして、ランスロットも笑っていた。

互い距離を保って間合いを取る、不用意に間合いに入れば、双方どちらかが死ぬと互いに予感していた。

ゆっくりと円を描き螺旋状に間合いを縮める、互いの間合いが重

なる瞬間。

ランスロットの渾身の一撃が、彼の心臓に向かって突き出された。彼は同時に素早く抜刀し体の位置を右斜めに入れ替え八相に構え、流水の如く体を捻り、ランスロットの突きを紙一重で避け、疾走する。

「何だと！」

ランスロットは驚いた。一瞬にして己の間合いに入り込まれた事もそうだったが、真に驚くべきはその体捌き。「こいつは……とんでもない拾い物だ」瞬時に体を反る。

彼は、下段からランスロットの顔面を目掛け切り上げた、切先は兜を翳めて空を切る。

互いにすぐさま体勢を立て直し、間合いを取り直す。

「見た事もない剣技を捌くなんて、貴方は化け物ですか？」

「その台詞はそのまま貴殿に還そう、兜をしてなければこちらが傷を負わされていた」

二人の間に静寂が流れる、傍観していた兵士達は目の前の出来事に呆然としている様だ。

「気に入った！」

ランスロットからは先程までの殺気がまるで嘘のように無かった。

「気に入った……？」

ランスロットは持っていた槍を、槍兵に渡すと私の馬を連れて来るように命じた。

そして彼の目前に立ち、兜を脱いで素顔を曝け出した。

「我が主の城に着いたら、審議に問われるが、身の安全は必ず保障する」

兜を脱いだランスロットは、黒く長い髪、碧い瞳に端正な顔立ちをしていた。

彼は一瞬心を奪われた、だがその姿に違和感を感じた。口から思わず言葉が漏れる。

「綺麗だ……」

ランスロットは笑った。

「貴殿は、男が好きなのか？生憎私にはその気はないぞ？」

「俺にだってない！本当にそう感じたから言葉に出してしまっただけだ」

まだ笑っているランスロットを横目に、彼は酷く後悔した。

「貴殿の名を伺いたいのだが？久々に血肉が踊った相手だ、名を知らぬとあつては騎士の恥だからな」

「綾瀬 九郎・・・」

「アヤセクロウ・・・？」

ランスロットは難しい顔をしている、どうやら言いにくそうだった。

「クロウでいい、異界の言葉は発音しにくいだろっから」

「ではクロウ、我が主の城キャメロット城に誘おう」

兵士が目の前に馬を連れてきて声をかける。

「どうぞ、クロウ様」

「え？様なんてつけなくていいですよ」

「ランスロット卿が認めた方に敬意を払うのが騎士の務めです、

事実、私共は貴方様の技量を見て感嘆してしまいました」

クロウは困りながらも馬に乗り、兵士に向かって言葉かけた。

「ありがとう」

兵士は膝を着き、会釈する、ランスロットはその光景を見てクロウは大物になるかも知れぬと感じていた。

「ではクロウ用意は良いか？」

「馬に乗るのは少々だけど、何時でも出発できる」

「そうか、では皆よ、私に続け！城に戻るぞ！」

出立の合図と共に馬は走り出した、クロウはこの時、これから先、己がどうなるのか想像だにしていなかった。

真偽（前書き）

感想、指摘など、気軽に意見頂ければありがたいです。

この物語はフィクションであり、作者自身、初めて書く作品ですの
で読んで下さる皆さんの意見をお聞かせ下さい。厳しい指摘も歓迎
しております。

真偽

鬱蒼とした森を一人の騎士が馬に跨り疾走していた。いかにも騎士らしい勇猛さを兼ね備えた風貌のその騎士は、深緑で囲まれた森の中、疾走する騎士団が目にとまった。

「察するに、あれはランスロットの騎士団か？しかし最後尾にいるアレはなんだ」

一見普通の騎士団の様であったが、最後部に全身漆黒の姿をした騎士には見えない人物が見えた。

「何か好くない事が起こりそうだな、一刻も早く帰還せねば」

手綱を強く握り、馬に鞭を入れた。手綱の合図と共に馬は先程より加速し森を疾走してゆく。

/

一方その頃、深緑に囲まれた森をランスロット一団は疾走していた、馬の駆け走る音がこだまする。

「皆、城が見えてきたぞ！王に失礼が無きよう準備を怠るな」

クロウは困惑していた、準備を怠るなど言われても、この世界の礼儀なんて全く知らない事。王に謁見して今後の自分の行く末がどうなるのかも彼は不安で落ち着かなかつた。

「どうしたクロウ？顔色が悪いようだが？」

「ランスロット、俺はこの世界の礼儀を知らない」

そう言ったクロウに対しランスロットの言葉は、実にのんびりとしたものだった。

「当然ではないか、クロウは異界の者だ。礼儀を知らないのは当たり前だろう、何かあれば我等がフォローに回るから心配するな」

「我が王は寛容な方だ、そう心配するな」

クロウはランスロットの言葉に安心した。

馬上で会話をしている間に、森を抜け城に到着していた。

一様に馬の速度を落とし、緩やかに城門の前で停止する、城門の前には兵士が門を挟んで立っていた。ランスロットが兵士に命令する。

「開門せよ」

兵士は開門の合図と共に門を開く、ランスロット先頭に次々と門をくぐってゆく、その時兵士の一人が槍をクロウに向ける。

「待て！貴様は何者だ！その様な姿で、我等が城内には入れさせぬ」

すると異変に気づいたランスロットが憤慨する。只事ではないと城内の民で野次馬が出来た。

「その者は、私が認めた者だ。文句があるならば私に言うべきではないか？」

兵士は驚き慌てる、すぐ様、跪いて許しを乞う。

「ランスロット様、御無礼申し訳ございません」

その言葉にランスロットは更に、憤慨する。

「許しを乞うのは私ではなく、クロウにはないか！」

兵士は我に返り、クロウに向かい直し、跪く。

「クロウ様、ご無礼の数々をお許し下さい」

クロウは、嫌な顔一つせず、兵士に向かって話しかける。

「お立ちください、貴方はアーサー王の仕事を忠実に実行したのです。城を護るのが兵士の務め、何を恥じる事があるんです。もし私が本当に不審な輩であるなら尚の事。貴方達がこうして忠実に務めているからこそ、城の安全が保たれてるのではないですか？」

城門を護る兵士達、民衆は一様に感嘆した。兵士は面をあげ涙を流していた。

「クロウ様の優しき、お言葉在り難く存じます、どうぞお入り下さい」

城内は騒然としている、先程の一部始終を見ていた者によって、すぐさま城内に噂が飛び交う。

「なんでもランスロット卿が認めたら面白いわよ」

「一部始終見てたを見てた奴の話じゃ騎士らしい振る舞いをしてらしゃったとの話だ」

「全身漆黒で気味が悪い」

「城に災いをもたらすんじゃないかしら」

良い噂もあれば悪い噂の飛び交ってる様だった。

騎士団は城に向かい城下を馬に乗り闊歩している、周囲は民衆で溢れていた。

ランスロットは難しい顔をしていた、クロウはランスロットに近づき小声で囁く。

「何で難しい顔してるのさ？」

「クロウ、今はあまり城内を騒がせたくなかったのだ、これから審議にかけられるクロウを目立たせたくなかったのもあるが、クロウが言ったことは間違っではないなかった。少しあの兵士に言い過ぎた事もある。そう言うこともあってな……」

ランスロットは反省してる様子だった。

「俺は事実をいったまでだよ、それに俺は頭を下げられるような身分でもない」

「しかし、クロウが言った言葉は真に騎士らしい言葉だったぞ、これが良い方向に向いてくれると良いのだがな」

ランスロットと話していると城下の大広場に突き当たった、唯一、城下で一番大きな場所だった。

クロウが上を見上げると少し離れた所に城はみえていた。

「此処から見ても大きな城だな、本当に此処は元いた世界じゃないんだな」

改めて自分がどういう状況に置かれているのか、クロウは頭を痛める。大広場に視界を戻すとそこには

大きな噴水があった。噴水からは水が滾々と湧き出していた。

クロウは噴水を横目に城へ向かう、先頭に行くランスロットが騎士団に向かって命令した。

「皆、止まれ」

クロウも慌てて馬を止める。

城への道を一人の騎士が塞いでいたようだった。

「これはガウエイン卿、何用ですか？我等は今から王に謁見しに行く所なんだがね」

ランスロットの顔は強張っていた。

「クロウ、非常にまずい事になりそうだ。よりもよってガウエイン卿が出てきた」

「ガウエイン卿？」

「ああ、説明は後だ、どうにかガウエイン卿を説得せねば城まで辿り着けないであろう」

向かいの騎士は猛々しく咆哮をあげる。

「ランスロット卿、貴公は下がっててもらおうか、私が用があるのはその漆黒の者のほうだ、その様な輩を王に謁見させるわけにはいかんであるう」

「ガウエイン卿、事の経緯は審議の場で尋問するのが一番良いではないか、王や他の騎士の手前もある」

「ランスロット卿、城への道を通るのはこのガウエインを倒さねば通れないと言う事が理解できぬのか？」

ガウエイン卿が一度言い出すと梃子でも動かない事を知っている、ランスロットは顔を歪める。

「ならばガウエイン卿、貴殿の相手は私がしよう」

「くどいぞ、ランスロット卿！用があるのは貴殿ではない！その漆黒の者だ！」

互いに睨み合いが続いている、ガウエインは痺れを切らし始めていた。

「ランスロット、庇わなくていい。あのガウエインって人、道を始めから譲る気は無いようだ」

「クロウ本気で言ってるのか？ガウエインはお前を殺す気ではないぞ！」

「分かつてるよ、ああいうタイプは言葉で説得するより、刃を以て説得するのが早い」

そう言うとクロウは馬を降り、前に歩み出る。同時にガウエイン卿も馬を降り、こちらに歩みだす。

「クロウー！」

ランスロットは必死に呼び止める、クロウはランスロットの言葉を聞き流す。

クロウとガウエインの距離が互いに縮まってゆき、手を伸ばせば互いに触れられる距離まで近づいていた。

只事ではない様子に周囲は、民衆で完全に野次馬が出来上がっている。

「あの漆黒の者死んだな、ガウエイン卿に敵う訳がないだろう」

「ランスロット卿が認めた方だぞ、ガウエイン卿にも劣らないだろう？」

野次馬の間では様々な意見が飛び交っているようだった。

クロウとガウエイン卿は互いに見つめ合う、そしてガウエイン卿が言葉を発した。

「漆黒の者、大した度胸だ、それだけは認めえてやる。このガウエインの前に何の策もなく出てくるとは、余程の愚者か、大器の者か、果たしてどちらか？」

ガウエインは獰猛な笑みを浮かべている。

「ガウエイン卿、そんな事俺にはどうでもいい事だ、貴方を退けないと王に謁見できない。だから貴方と対峙してるだけだ、理由はそれだけで十分だ」

ガウエインは笑う。

「このガウエインを前にして大口を叩くか、今だ臆せずいられる事は褒めてやる。が貴様は前者だな、愚者は王に謁見せず此処で死ぬことになるだろう」

「此処で死ぬかどうかは、それは貴方が決める事じゃない、俺が決める事だ」

ガウエイン卿は剣を抜いた。

「我が愛剣ガラティーンよ、愚者に神罰を下せ」

一閃、ガウエイン卿は横一文字にクロウを斬りつけていた。クロウの体はそのまま地面を滑る様に吹き飛ばされた。

「クロウ！！」

ランスロットは叫んだ。

「あつけない物だ、度胸の割には他愛も無い、どんな物かと思えばやはり唯の愚者か」

やがて土の粉塵の中に人影が映し出される、粉塵は収まり、皆一様に目を見張る。

クロウは片膝を着いて、鞘から少し刀を抜き刀身で剣を受け止めていたようだった。

「今のを防いだか、普通ならば体ごと切り裂いているんだがな」

その言葉と裏腹にガウエインは、内心驚いていた。秘蔵の愛剣の技を防がれたからだった。ガウエインはクロウに問う。

「漆黒の者よ、どうやって今のを防いだ？」

「それを聞いてどうする、教えた所で貴方には使いこなせない」

クロウの大口を聞きガウエインは歓喜をあげ、笑い出す。

「ふはははははは！実に見事だ！こんな所で強者に出会えるとは、ランスロット卿が認めたのも嘘ではないか」

「今の技を防いだのはお前で二人目だ、一人はそのランスロット卿、二人目は漆黒の者お前だ」

そう言い放つとガウエインはクロウに追い討ちをかける、クロウは今だ片膝を付き微動だにしない、

ガウエインはクロウに向かい走り出す、そして真上からクロウ目掛けてガラティーンを振り下ろす。瞬間クロウは鞘から刀を引き抜き、両手を使い刀身で受け止める。

甲高い金属音がこだまする。

「くっ！」

余りの重い剣戟にクロウは、歯を食いしばる。

ガウエインの剣に一層力が増す、このまま押し切るつもりの様だ。クロウは焦った、このままでは刀が折れてしまう危険性があつたらだ。

しかしクロウは、溢れ出る高揚感で思わず笑わずにいられなかった、クロウの口元が緩む。

「一日に2度も化け物に会うとは思わなかった。ついてるのか、ついてないのか」

クロウは刀身で受け止めるのをやめる事にした。だがこのまま刀身を支えてる手を離せば真つ二つになるのは確実だった。

「どうした？漆黒の者。守ってるばかりでは勝てぬぞ！」

クロウはこの状況を打破にはガウエイン卿の力を利用する事にした。どうせこのままならば真つ二つだと悟っていたからだだった。

「たかがこれしきの事で勝つた気になってもらうと困るなガウエイン。貴様の力はこの程度か？」

その言葉にガウエイン卿は激昂する。全力で剣に力が注がれる。刀と剣からは火花が出始めている。クロウは、内心、いつ刀身が折れるか肝を冷やしていた。

「今度はこちらから仕掛けるとしようか、ガウエイン」

「何を言うこの状況では仕掛けようもあるまいに」

「ガウエイン卿、挑発に乗ってくれて感謝する」

「何だと！」

一瞬にしてクロウは刀身を左斜めに傾ける、力の込められたガラティーンは刀の刀身を滑ってに大地に突き刺さった。その刹那、クロウは刀を引きガウエイン卿の喉元へと刀の切先を突きつける。

「貴様！最初からこうなる事を計算してたのか！」

「最初からって言うのは間違いです、ガウエイン卿、貴方は力に頼りすぎです、俺が膝を付いていたのはガウエイン卿の最初の一撃が効いて立てなかつたからです」

「付け加えて言えば、ガウエイン卿が真上から打ち込んでくれた事が活路を見い出せたる要になりました。事実いつ刀身が折れるか

冷や汗物でした。」

「ふん！小僧が一人前に講釈を垂れおつて！」

そう言つとガウエイン卿は無骨に愛剣ガラティーンを鞘へと収める。クロウも刀を引き、鞘へと静かに納刀した。

ガウエインは兜を脱ぎ素顔を晒す。

その素顔は肩にまで届きそうな、白髪交じりの茶髪を後ろで一つに束ねている、瞳は薄い青で、顔は彫りが深く、ゴツゴツとしていた。一見、無骨そうに見えるのだが決して下品ではない品格を備えていた。

「認めざる得まい、その決断力と判断力、何より死を恐れる胆力。漆黒の者、名を覚えてくれまいか」

クロウはランスロットとの事を思い出した、この世界ではクロウで通す事した。

「クロウと言います、ガウエイン卿」

「見事な腕前だ。ランスロット卿が認めたのも頷ける、私もお前を認めよう、クロウよ」

「有難うございます、ガウエイン卿」

終始を見守っていた、ランスロットを始めとする兵士、民衆はクロウとガウエインの決闘が終わつたのと同時に歓喜した。

「おいおい！あのクロウとか言う漆黒の剣士、ガウエイン卿に勝利したぞ！」

「だから言つたじゃないさ、ランスロット卿に認められた方だつて！」

「馬鹿言つなよ、クロウ様が負けるつて言つたのは誰だ！」

民衆や兵士達は口を揃えて勝手に言い合いをしている。

クロウとガウエインが居る場所へ馬に跨つたランスロットが降り立つ。

「久しいな。ランスロット卿」

「ご無沙汰してます、ガウエイン卿」

「ランスロット卿、クロウは何処の出だ？この様な戦い方は初め

「見る」

「今わかる事は、クロウは異界の者だと言う事、そして類稀なる剣技、事実ガウエイン卿も体験済みでしょう。我々では判断しかねるのでアーサー王に謁見を願うつもりだったのです」

「それは無粋な事をした、だがこの年になって再び、血肉が踊るとは思っても見なかったぞ」

ガウエインとランスロットは互いに目を合わせ、視線をクロウに向ける。クロウは二人に見つめられたので恥ずかしい気持ちになつた。

「ランスロット卿、ガウエイン卿、あまり見ないで下さい。恥ずかしいではないですか」

ランスロットとガウエインは目を合わせ口々に述べた。

「クロウ何を恥じる、我等に認められたのだぞ、もっと堂々としていいのだ」

ランスロットがそう言うのとガウエインが続けて言う。

「先程とは差がありすぎるな、もっと気丈に振舞え、ではないと我等も困るであろうが」

二人から小言を言われながらも、自分に父と兄がいたらこんな感じだったのだろうかと思つて、クロウは内心喜んでいた。

「ランスロット卿、このガウエインも共に往こうぞ、クロウがこの様では審議が心配になりおるわ」

「ガウエイン卿、心遣い感謝します、有難く頂戴いたします」

ランスロットは騎士団に向かって号令をかける。

「ガウエイン卿と共に城に向かう、全員準備は良いか！」

兵士達は一同に素早く馬に跨り指示を待つ、ガウエイン卿も準備を終えていた。

ランスロットとガウエイン、兵士達が声を揃えてクロウに言う。

「クロウ?」「クロウ!」「クロウ様!」

ハッと我に返つたクロウは慌てて馬に跨る。

「ランスロット卿よ、クロウを見てると息子が出来たように見え

るわ」

「ガウエイン卿、私は弟が出来た様に思えます」

二人の卿がニヤついてるのをクロウは無視することにした。

ガウエインは、ニヤ付きながらも、遠い目でクロウを見つめていた、まるで若き日のアーサー王を彷彿させるクロウと言う若者を。

こうしてランスロット率いる騎士団とガウエイン卿、クロウは城へ向かって走り出した。

審議（前書き）

感想、指摘など、気軽にご意見頂ければありがたいです。

この物語はフィクションであり、作者自身、初めて書く作品ですの
で読んで下さる皆さんの意見をお聞かせ下さい。厳しい指摘も歓迎
しております。

審議

深緑に囲まれた、小高い山の上、威厳を放ち鎮座する豪華な城がある。

ランスロット一行は城門の前にたどり着く

「さあ着いたぞ、クロウ。此処が我が主、アーサー王の居られるキヤメロット城だ」

クロウは、呆然としていた。

呆然としているクロウを見て、ガウエイン卿が話しかける。

「どうしたクロウ？しつかりせぬか！」

ガウエイン卿の言葉に我に返ったクロウは、問い返す。

「これって本物の城・・・？」

ランスロットとガウエイン卿は、怪訝な顔をする。

ランスロットはクロウが異界の出であったのを思い出した。

「なんだ？クロウ、城と言う物を見たことないのか？」

「実物を見るのは初めてだよ・・・立派過ぎて声もでない」

それを聞いたガウエイン卿は、自分の事のように喜びを声にする。

「そうだろう！クロウ、この様に立派な城は他国にはないぞ！」

「兎も角だ、此処で立ち往生しても仕方あるまい。ガウエイン卿、クロウ。場内に入るぞ」

そついうとランスロットは馬を降り、城門の兵士に願い出る。

「すまないが至急、アーサー王に、ランスロットが謁見を願いたいと言付けてもらえぬか」

「ハッ！了解しました、ランスロット様」

城門の兵士は、他の兵士に開門の合図を送ったあと、急いで王の元に走る。

「ランスロット卿が帰還なされた！開門せよ！」

ギィィィ・・・

音を立て木の柱でできた城門の扉が天を仰ぐ様に上っていく。

ランスロットは、今後の指揮執った。

「兵士は兵舎に戻り、各自の任につけ！騎士は王との謁見の際、クロウの証言者になってもらう」

兵士と騎士達は一同にランスロットに膝を付く。

「了解致しました、ランスロット様」

そう言つと兵士達は、場内に入り全ての馬を厩しほに連れていく。

「では、ガウエイン卿、クロウ参るとしよう」

ランスロットを先頭に、右にガウエイン、左にクロウ、その後ろを騎士達が城門をくぐり、王宮へと歩を進める。王宮へと続く道は赤いカーペットが引かれ、中庭には美しい木々は大地に根を下ろしていた。

ランスロット一行が、宮殿へ向かい歩みを進めていると、すれ違つ、侍女、騎士、兵士達は片膝を付き、皆一様に頭を下げる。その光景を見て、クロウは驚いていた。

「ランスロットとガウエイン卿って・・・こんなに凄いな」

その言葉にランスロットとガウエインは互いに見合う。

「その騎士と五分に渡りあったのだ、臆せず自身を持ってクロウ」

「負け惜しみではないがなクロウ、ワシは本気は出しておらんぞ」
二人の励ましに、クロウは穏やかで暖かい気持ちになった、今まで自分を理解しようとしてくれる人が周囲に居なかつた為だった。

そう心の中で想いながらも、負けじとガウエイン卿に言い返す。

「ガウエイン卿、俺も本気を出してない」

ランスロットを挟み、お互い睨み合う、その様子を見てランスロットは困った顔をしている。

「やれやれ、まるで本当の親子の様だ。ガウエイン卿、御子息が増えて良かったですね」

ランスロットは苦笑していた、ガウエイン卿は不機嫌そうだった。一行は、中庭を抜け、吹き抜けになった広い廊下を早足に抜けて行く。

やがて、王宮の扉に突き当たる、そこには扉を守る騎士が二人、

扉を挟み両側に立っている。

騎士がこちらに気づき、ランスロット一行に、膝を付き頭を下げ
る。

「ランスロット様、アーサー王より承っております。どうぞお入
り下さい」

扉が開かれた。

床は一面、豪華な赤い絨毯が敷かれ、王宮を支える柱が6本、そ
の柱の本数分、騎士が柱に沿って立って居た、他より一段高くなっ
ているその場所に、王と王妃が玉座に鎮座していた。

ランスロット一行は玉座の手前まで進み、片膝を付き礼をする、
ランスロット、ガウエイン卿は共に、一歩前に出て、王と王妃に挨拶
をする。

「アーサー王、グイネヴィア王妃、只今帰還致しました」

アーサー王は二人に向かい、話しかける。

「大儀であった、ランスロット」

「ガウエイン、久しいな、元気におったか！」

アーサー王は立ち上がりガウエイン卿の肩を両手でバンバンと叩
く。

「この通り、無事元気で暮らして居りますぞ！、アーサー王」

「そうか、それは良かった、病にでも遭ってたならと心配してお
ったのだ」

「もう御主も若くないのだからな」

アーサー王はそう気さくに笑った。

その顔立ちには、少しだけ彫が深く、瞳は薄い緑色をしていた、赤
い外套を羽織り、銀色の鎧を纏っている、金色の髪は肩に届きそ
うな位だ。頭の上には王冠を乗せている。

クロウの目には、アーサー王が、王様って感じには見えなかった。
威厳があるのだが、親しみ深い感じがしたからだった、クロウの思
う王様のイメージとは少し掛け離れていた。

突然、アーサー王は思い出したかのように声をあげる。

「おお！そうだったな、ランスロット。昨夜、落雷が落ちた場所に付いて聞こうと思ったのだ」

「その事でアーサー王に相談があったのです、落雷の落ちた場所に向かった所、私の後ろにあります、青年が倒れていたのです」

「そうか、しかし風変わりだな。髪の色から瞳の色、身に着ける物まで。漆黒とは変わっておるな」

「アーサー王、風変わりなのは、姿だけではございません。異界の剣技を使います」

そう述べたランスロットを、アーサー王は見つめる。

「ランスロットを疑う訳ではないが、俄かに信じがたい。」

一人の騎士が、片膝を付き顔を伏せ、アーサー王に向かい願いでる。

「失礼ながら申しあげます、アーサー王。ランスロット卿が述べた事は、真の事でございます」

アーサー王はどうしても信じれなかった、そこにガウエイン卿が申し出る。

「アーサー王、ランスロット卿とその騎士が言う事は真の事ですぞ。不覚にもこのガウエイン後れを取られました、年には勝てませんな」

ガウエイン卿はそう述べたあと豪快に笑った。

アーサー王はクロウに近づいていく。目の前までやって来て、観察する様に見つめる。

「真に不思議な髪と瞳と顔をしておる。よく見れば、女性の様な顔をしておる」

「私はこのキャメロット城の君主、アーサー・ペンドラゴンだ。貴殿の名はを伺いたい」

クロウは緊張しながらも言葉を絞り出す。

「アーサー王、お初に御目にかかります、名はクロウと申します」

「クロウか、真に名も漆黒だな、しかし、未だに信じられん。どう見ても背丈といい、骨格といい、女性とそうは変わらぬぞ」

「クロウ。ランスロット達を打ち破ったのは真か？」

「はい。アーサー王」

アーサー王は、窓辺に立ち、考え込んでいる様だった。暫くして、クロウには信じられない言葉告げられた。

「国と民を思えばこそ、クロウには地下牢に入ってもらおう。名も姿も漆黑、剣に至っては、円卓の騎士と同格。城内をうろつかせる訳にはいかぬであろう、城内の混乱も避けねばならん」

「ランスロット、ガウエイン。貴公らには申し訳ないが、クロウは当分間、地下牢にいてもらう事とする」

ランスロットとガウエインは即座にアーサー王に申しでる。

「アーサー王、お考え直し下さい、このような仕打ちは余りではないですか！」

「どうか、私の顔に免じて地下牢だけは勘弁していただいだけぬか」

アーサー王は窓辺から離れ、玉座に座り言葉を述べた。

「ランスロット、ガウエイン、如何なる肩入れも許さん、王たる者、一番に国と民衆の事を考えねばならぬ、私も本音を言えばその様な事はしたくない。国を想えばこそだ、分かってくれぬか？」

ランスロットとガウエインは苦虫を噛んだ表情をしている。互いに刃を交えた強者が地下牢行きに成るのが納得できないでいる様だ。クロウは愕然としていた、ランスロットやガウエイン卿の助力も虚しく、地下牢行きになったのが信じられなかった。

アーサー王は立ち上がり、騎士に命じる。

「クロウを地下牢に連れて往け」

ランスロットとガウエインは声を上げ、立ち上がる。

「クロウ!!!」

二人の卿の声も虚しく、クロウは地下牢に入れられる事になった。

地下牢 (前書き)

感想、指摘など、気軽に意見頂ければありがたいです。

この物語はフィクションであり、作者自身、初めて書く作品ですの
で読んで下さる皆さんの意見をお聞かせ下さい。厳しい指摘も歓迎
しております。

地下牢

クロウは深緑に囲まれた、小高い丘に鎮座するキャメロット城の地下牢へと、幽閉される事となった。王命により、クロウは騎士達に連れられ、王宮から出される。

王宮から出て、吹き抜けになった広大な廊下の角には、地下へと降りる階段があった。

騎士達に連れられ、石段を下りて行くと、周囲を石で囲まれた、牢屋への出入り口が鉄格子になっていて、牢屋が無数にあった。

牢屋への入り口には、鉄格子で柵が設けられていた。

鉄格子の前には、二人の牢兵が槍を携え立っている。騎士達がクロウを連れて降りてきた事に気づき、素早く姿勢を正す。

「ご苦労様です、今鍵を開けますので、少しお待ちください」

鍵を回す金属音が鳴り、鉄格子の扉が開かれる。牢に入る間際、牢兵が話しかけて来た。

「申し訳ないのですが、武器を預からせて頂きます」

クロウは、刀を見つめて、一瞬戸惑うと静かに牢兵に受け渡した。もう一人の牢兵の案内により、騎士達は一番奥の牢屋に連れて行かれる。

クロウは無数にある牢に、囚人が居ないことに気が付き、騎士に問い正した。

「この牢には俺以外の、囚人はいないのかい？」

クロウの質問に、一人が騎士が答える。

「此処は、身分の高い者が罪を犯し幽閉される場所です」

「そうか」

騎士と会話していると牢屋の最深部に着き当たる。

牢兵が鉄格子の鍵を開ける。

クロウは黙って牢に入る。すると王宮でアーサー王に申しでた騎

士が話しかけてきた。

「クロウ様、申し訳ありません。何の力添えもできず・・・」
騎士は、長めの黒髪を後へ流し、中性的な顔立ちをしていた。深みのある碧眼から涙が零れ落ちている。

クロウは、騎士に優しく語りかける。

「泣かないでください。最悪の結果を考えてなかった訳ではないですから平気です。それに、当分の間と言っていましたし、アーサー王は俺を身分の高い者として配慮し、扱ってくれてますから」

クロウは牢に入れられた事よりもこの騎士が泣いてる事が気になつた。

「正直に言うと、貴方が俺の為に泣いてくれるのが不思議でなりません」

騎士はその問いに答える。

「クロウ様、私も貴方と刃を交えた一人だからです。兜で顔を覆っていたので、覚えていないのも無理もありませんが、出会った時、最初に貴方に斬りつけたのは私なのです」

その言葉にクロウは思い出す、

「あの時の・・・剣士の方ですか」

「はい。ランスロット様と戦うクロウ様の姿を拝見させて頂きました。故に他の者には、理解しがたい物でしょう」

「一瞬ではありましたが、この身で刃を受け、私なりに感じました。才あるが故、常に孤独、深い孤独を彷徨う刃で御座いました」

「僭越ながら申しあげる所。クロウ様は、何故我等を斬らなかつたのです？」

「人を斬るのは、覚悟が必要です。強いからと言って無闇に人を斬りたくは無かつた」

「ですが、あの時私は、殺す気でクロウ様に剣を向けました。敵同士であるなら当然の事ではないですか？」

「相手が、本当に敵であるかどうかは、刃を交えただけではわか

らないでしょう。意見が食い違ったとしても、全てが自分と相容れないとは限らないですから」

「クロウ様は、お優しいすぎます。このままだといつか命を落とす事となります」

「心配してくれてありがとうございます。好かったら、貴方の名前を教えてくださいませんか？」

「私はパーシヴァルと申します。以後お見知りおきを」
そう述べるパーシヴァルは牢兵に申しつける。

「毛布を持ってきてくれないか。夜間は寒くなる、クロウ様に何かあつては、心配するランスロット様とガウエイン様に申し訳が立たない」

牢兵は急いで牢屋に置いてある毛布を持って来た。毛布をパーシヴァルに受け渡す。

「夜間は、冷えるのでお使い下さい。何かあれば牢兵に言つて、私を呼んで下されば、出来る限りの事をしますので」

クロウは毛布を受け取り、壁にもたれ掛かった。

「ありがとうございます・・・パーシヴァル・・・それと二人に俺は大丈夫だと伝えて・・・くれ」

パーシヴァルにそう言つとクロウは、そのまま深い眠りに落ちていった。

そんなクロウを見て、パーシヴァルは余程、疲れていたのだろうと察した。牢へ入りクロウの手から毛布を取り掛ける。

「今日一日、見知らぬ土地で、この様な扱いを受けられては疲れて当然だろう」

牢から出て牢兵に鍵を掛けさせると鉄格子の入り口を通り抜ける。そして、二人の牢兵に言い放つ。

「クロウ様は、ランスロット様とガウエイン様に認められた方だ。何か遭つたら只ではおかぬ」

パーシヴァルは二人に言い含めると、騎士達と共に石段を登つていった。

一方、王命であれ、納得できない。二人の卿は憤りを隠せないでいた。

「アーサー王の言う事も、我等も分かる。だが幽閉する事もなからう！」

「ランスロット、アーサー王はどうしたのだ？昨夜の落雷にしても、高が落雷。貴公の騎士団を出してまで詮索することもなからう？」

二人の卿は、府に落ちないでいた。

「クロウはどうしてるかの・・・」

ガウエイン卿が心配するのも、無理はないとランスロットも思っていた。

「夜になると、牢屋は一段と冷えるからな。風邪でも引かなければよいが」

二人が心配していると、扉越しから声が聞こえた。

「ランスロット様、パーシヴァルです。クロウ様から伝言を託っております」

「入室を許可する、入れ！」

「失礼致します」

パーシヴァルは二人の卿の前に歩み出て、片膝を付く。

ランスロットは心配した顔で、パーシヴァルに問いたです。

「クロウの様子はどうか？」

「気丈な方です。牢に送られたと言うのに、お二人に大丈夫だと伝えておいてくれと、託っております」

「そうか・・・」

ガウエインは困った顔をして言う。

「気丈か、頼りないんだか頼りになるのか分からん奴だな。クロウがそう言うなら我等は待つしかあるまい」

「そうだな、暫くは様子見だな。パーシヴァル、クロウの監視を怠るな！」

「ハッ！」

返事をし、パーシヴァルはランスロットの部屋を後にする。

「ガウエイン、我等も寝るか」

その言葉にガウエインも同意する。

「今日は、色々あり過ぎて疲れたわい。特に地下牢にいるクロウのお陰でな」

「確かに、年寄りには荷が重かるう？」

「まだ現役で入られるわ！今日は体調が悪かったのだ」

ランスロットは冗談交じりにガウエインを弄んでいる。冗談に付き合うガウエインにも、クロウを通して、いつの間にかランスロットとの絆が生まれ始めていた。

「では、ランスロット。ワシは寝るぞ」

「ああ、また明日な、ガウエイン」

ガウエインは、部屋から出て自室に戻って入った。

ランスロットも、ベットへと体を投げ出す。

「今日は、クロウのお陰で本当に疲れた・・・」

独り言を呟きながらランスロットも、睡魔に誘われ眠りに入ってしまった。

少女と粉雪（前書き）

感想、指摘など、気軽にご意見頂ければありがたいです。

この物語はフィクションであり、作者自身、初めて書く作品ですの
で読んで下さる皆さんの意見をお聞かせ下さい。厳しい指摘も歓迎
しております。

少女と粉雪

深夜を向かえ地下牢は、先程までとは違う顔を見せる。余りの寒さにクロウは、目が覚めた。

「地下牢行きを宣告されてから、こうなるのは予想してたけど、想像以上に冷え込むな・・・」

寒さで目が冴えてしまつてクロウは寝付けないでいた。毛布に包まる様に、横になる。

寒さに震えるクロウの目の前に、光の粒が落ちてくる。体勢をぐるつと真逆に入れ替えて廊下に目を向ける。

どうやら、地下牢の突き当たりにある、大きな鉄格子の窓から入つて来てる様だった。

蛍の光に似た、光の粒は鉄格子の窓を通り抜け、空中を浮遊している。

「綺麗だなあ・・・それにしても尋常じゃない数だな・・・」

光の粒は、クロウの居る、牢屋の鉄格子をすり抜け、ゆっくりと人の形を形成していく。

クロウは、目の前で何が起きてるのか理解できかった。

光の粒はやがて、人の姿に変わって行く。

一瞬、眩い光を放つ。クロウは眩しさの余り瞬間的に瞳を閉じた。そしてゆっくりと開く。

そこには自分と同じ位の年の純白のドレスを纏った、可愛らしい女の子が立っていた。

床まで根を下ろしそうな、真直ぐに伸びる金髪の髪。綺麗に整った眉、高くも低くも無い、鼻筋の通った小さな鼻、唇は厚めで瑞々しかった。

クロウが特に気になったのは、赤と碧の左右非対称の瞳だった。少女は、こちらを見つめる。

「こんばんわ。クロウ」

「君は、誰？何で俺の名前を知ってるの？もしかして幽霊？」
彼女はクスクスと笑った。

「違うわ。クロウには秘密よ。それに質問の数が多すぎるわ」
クロウは、恥ずかしくなって頬を染める。まるで子供だ。

「じゃあ一つだけ。君の名前を教えてください？」

彼女は、困った顔して恥ずかしそうに答える

「じゃあ、特別。クロウにだけ名前を教えてください」

「私の名前は、ヴェルフィーユ」

「こんばんわ、ヴェルフィーユ」

挨拶を交わして、互いに少しの間、沈黙が流れる。

ヴェルフィーユはクロウの目の前に座り、突然、息が掛かりそうな位、顔を近づける。

「クロウの瞳は、漆黒なのね。でも透き通っていて、とても綺麗」
ヴェルフィーユが、突然近づけて来たので、クロウは驚き頬を真赤に染める、なんとか離れようとする。しかし後ろは完全に壁だった。

「ヴェルフィーユ、少し離れて・・・顔が近い」

「どうして？」

「どうしてって・・・ヴェルフィーユが凄く可愛いから」

ヴェルフィーユは頬を染め、恥ずかしそうに言う。

「クロウ、もしかして、私を口説いてるの？」

クロウは絶句し、高速で首を左右に振る。

「む。何でそんなに、強く否定するのよ！これでも私凄くもてるんだからね、引く手数多で、困るくらいなんだから！」

ヴェルフィーユは怒ってる様だった。

「ヴェルフィーユ、君は可愛いし、綺麗だとも思う」

ヴェルフィーユは機嫌を直し、恥ずかしそうに頬を染めてる。

「だけど俺には、人を好きになるとか、そう言う感情がわからないんだ」

「どういうことなの？」

ヴェルフィーユは不思議そうに見つめてくる。

「言葉そのままだよ。感情が無いに等しいとでも言ったほうが早いかも知れない」

「俺には何も無い、あるのは刀だけだから」

クロウの瞳に影がさすのをヴェルフィーユは見逃さなかった。

ヴェルフィーユはさらに距離を詰める。

クロウは逃げ出そうとした。後ろは壁で身動きが取れないの思
い出す。

「しまった！」

二人の距離は先程より、更に縮まっていた。互いの唇が触れそ
うなほどに。

互いに見つめ合う。

「クロウ怖い？」

「怖い物なんてない」

「嘘。本当は、怖いんでしょ？」

「何が？」

「人と触れ合うのが、怖い癖に強がってる様に見えるわ」

その言葉にクロウは感情を露にする。

「怖くないって言ってるだろ！」

「クロウ、貴方はこのままでは闇に沈む事になるの。それだけは
絶対させないわ」

「貴方は、私の運命の人。だからこうして貴方の前に現れたの」

「だからお願い。動かないで静かにして」

ヴェルフィーユは、クロウの額に自分の額を押し当てた。そして
目を閉じる。

ヴェルフィーユの口から聞き取れない言語が紡ぎだされる。

「TUBDSSO*DHKDDDJKL*JGDDSFHKL*J

ILLLK***」

言葉を紡ぎ終えた途端、クロウは意識を失った。

ヴェルフィーユは宙に浮かび、俯瞰するように湖に降り立つ、水面から浮いた状態でヴェルフィーユは周囲を見渡した。

「此処がクロウの精神世界なの？」

湖を除いてそこは、白色で統一された、見渡す限り何も無い世界。「何も無いなんて異常だわ。普通の人なら何かしら世界を構築して広がってるのに……」

ヴェルフウィーユは湖を見下ろす。

「一度、入ってしまったからには、クロウを見つけるまで帰れないわ」

気合を入れるように両手で自分の頬を叩く。

「きつと、この湖の中にクロウはいる。助けなきゃ」

ヴェルフィーユは、目を閉じ、そして、静かに湖へと足をつけた。体はゆっくりと水面へと沈んでゆく。

足先から頭まで、水に浸かった感覚に覆われる。そしてヴェルフウィーユはゆっくりと目を開けた。

ヴェルフィーユは、驚き思わず声にする。

「綺麗。こんなにも水の中が透き通ってるなんて、でも……生き物がいないなんて不自然だわ」

「兎に角、潜ってみないと分からないわ、つべこべ言わずやるの。ヴェルフウィーユ」

そう言い聞かせるとヴェルフィーユは、体を反転させ水面を蹴る。勢いよく水中を潜ってゆく。その姿は、まるで人魚の様だった。もう、随分と潜っただろうか。一向に、水中の風景は変わらなかつた。

「本当に、クロウがこの湖の中にいるかわかんなくなってきたわね」

水中で立ち往生していると、少し先に、何かが見えた。

ヴェルフィーユは、勢いよく加速すると、やっとの思いでその場

所へたどり着く。

内部はドーム状になっていて、空気の膜が張っている様だった。ゆっくりと膜を抜け内部へと降り立つ。

目の前には大きな鉄製の扉が見えた。ヴェルフィーユは近づき、力一杯押してみたが、びくともしなかった。

「もう！クロウの馬鹿！こんな重い扉、どうやってあければいいの！私だって、他人の精神世界に入るの初めてなんだから！」

ヴェルフィーユは、瞳に涙を浮かべ怒りだした。

突然。涙を浮かべ怒るヴェルフィーユの頭上に、粉雪が降り注ぐ。粉雪は旋風を巻き、雪の塊へと変化していく。雪の塊はやがて女性性の姿へと変貌する。

見たことも無い服を着た女性は、優しい顔でヴェルフィーユに語りかける。

「こんにちわ。ヴェルフィーユちゃん」

ヴェルフィーユは涙を拭った。

「貴女は誰？」

女性は困った顔をしながら優しく答える。

「私はこの子の大切な人の残留思念。貴女が困ってるみたいだから助けに来たの」

「クロウの大切な人？」

「そうね、でも、それは私じゃないんだけど、私でもあるわ」

「そう。クロウの心の中に深く眠る大切な想いなのね」

女性は優しく微笑んだ。

「ヴェルフィーユちゃん、この子を助けてあげられる？私も長い歳月を懸けて助けようと試みたの。でも、私では助けてあげられないの」

ヴェルフィーユは強く頷いた。

「この先は、酷く過酷な物を見ることになると思うわ。その覚悟はある？」

「精神世界に入ると決めたときから覚悟はできてるわ。クロウを

助けないと私も出れないもの」

「それに・・・どんな事でもいいからクロウの事もっと知りたいから・・・」

頬を赤く染めながら初々しく話す。ヴェルフィーユを見て女性は優しく微笑した後、少し残念そうに微笑んだ。

女性は、ヴェルフィーユの手を取ると、扉の前まで歩き出した。

胸ポケットから小さな鍵を取り出しと鍵穴に鍵を差込み回した。

小さな金属音を立てて、扉が開く音がした。

女性は扉を少し開けてヴェルフィーユの頭を優しく撫で、扉の向こう側へと送り出す。

「ヴェルフィーユちゃん。これからは貴女が、クロウの傍に居てあげてね」

「貴女・・・もしかしてクロウの・・・」

女性は優しく微笑むと、粉雪の様に舞って跡形もなく散っていった。

ヴェルフィーユの足元が崩れ落ちてゆき、闇に吸い込まれてゆく。落ちゆく最中ヴェルフィーユは呟く。

「さよなら、クロウのお母さん」

幸福と喪失（前書き）

感想、指摘など、気軽にご意見頂ければありがたいです。

この物語はフィクションであり、作者自身、初めて書く作品ですの
で読んで下さる皆さんの意見をお聞かせ下さい。厳しい指摘も歓迎
しております。

幸福と喪失

ヴェルフィーユは目をゆっくりと開ける。木で囲まれた天井が視界に入る。

見たことの無い草が敷き詰められた部屋に寝ていた。

「・・・此処は・・・何処?・・・」

ゆっくりと体を起こすと、突然、男の子が飛びついてきた。

「えっ!」

男の子は、ヴェルフィーユの体に抱きつき嬉しそくに笑う。

「よかった。おねーちゃん目が覚めたんだね!」

そう言くと脱兎の如く階段を下りて行く。

「おかーさん!おねーちゃんが目覚ましたよー!」

「そう良かったわね」

「おかーさんもおねーちゃんに会ってよ、凄く綺麗なおねーちゃんなんだよ」

「わかったわ。おかーさんも行くから慌てないの」

ヴェルフィーユは狼狽ろっばいした。

「このままじゃ見つかったちゃう!」

何処か隠れるところはないか部屋を見渡すと、紙で作られた扉を見つめる。起き上がり扉を開けようとする。

「なんで開かないの・・・どうして?」

迷ってる時間はない、ヴェルフィーユは魔法で扉を通り抜ける。

「もう!なんて狭いの!でも此処ならきつと、見つからないわ!」

階段を上がって来る音が聞こえるに連れ、ヴェルフィーユの鼓動は早くなる。

「おねーちゃん!・・・あれ?いない」

「九郎の自慢のおねーちゃんは何処かな?」

優しく九郎の肩を抱き、微笑む顔の見覚えがあった。

ヴェルフィーユは驚きを隠せなかった。

「あの男の子がクロウなの？それにクロウのお母さん！」

クロウは、何かに気づき押し入れへと駆け出す。押し入れの隙間からヴェルフィーユの髪が零れ落ちていた。

「おねーちゃんみーつけた！」と同時に襖ふすまが開く。

ヴェルフィーユは心の中で呟く。

「クロウの馬鹿あ〜！」

クロウの手によって押し入れは開かれた。

「ほらおかーさん。おねーちゃん居るよ！」

ヴェルフィーユは涙を滲ませていた。

「九郎。お母さんには、見えないわ」

「どうして？」

「そうね。九郎は心が綺麗だから妖精さんが見えるのかもね。大人になると善い事も、悪い事も知ってしまうから、お母さんには見えないのかも知れないわね」

そう言うくとクロウに優しく微笑み、頭を撫でる。

クロウは不思議そうな顔で、聞いている。

「九郎には、ちょっと難しすぎたみたいね。すぐ夕飯だからお風呂

呂に入りなさい」

「うん！」

そう言うくとクロウのお母さんは階段を降りていった。

ヴェルフィーユは安堵した。そうよね普通見えるわけ無いもの。

見えるクロウのほうがかどうかしてるわ。

ヴェルフィーユが押し入れから這出ると、クロウが勢い良く抱きついてくる。

「きゃー！」

クロウが抱きついた衝撃で尻餅をつく。

「おねーちゃんは妖精さんなの？」

ヴェルフィーユの胸に顔を埋め、クロウは上目使いでこちらを見上げてくる。

一瞬、凄く可愛いと思ったヴェルフィーユは抱きしめそうになる

衝動を必死に堪える。

「そうよ、おねーちゃんは妖精さんなの。でもクロウにはどうして私が見えるの？」

「妖精のおねーちゃん。どうして僕だけ見えておかーさんには見えないの？」

質問を、質問で返されたヴェルフィーユは決めた。逃げようと。

「クロウ、おねーちゃんもそろそろ夕飯だから、妖精の国に帰らないといけないの。助けてくれてありがとう」

「えー！帰っちゃおうの？」

「ほら。クロウもお風呂に入らないと、ね？」

「うん！」

そう言うヴェルフィーユは魔法を詠唱する。

「H L D U ; P U N K * * D S E U ' W R K P *」

光の粒に姿を変え、空気に溶けていった。

後に残されたクロウは、階段を下りて行った。

「おかーさん、妖精のおねーちゃん帰っちゃった」

「残念、お母さんも見たかったわ。九郎は今からどうするのかない？」

「お風呂に入るー！」

「偉いわね、早く入ってきなさい。ご飯出来るわよ」

ヴェルフィーユは、下から聞こえてくる親子の会話を聞きながら、疑問に思っていた。

「不可視の魔法をかけないと誤魔化せないなんて、クロウの目は一体どういう目をしているの・・・」

「それに、無邪気なクロウを見ると、この後何が起こったのかも気になるわ。このまま様子を見るしかないわね」

ヴェルフィーユは、背中を壁につけ座ると、暫しの休憩を取ることにした。

/

外は霧が、立ち籠めていた。霧の中から黒いローブを纏った、男とも女とも判らない人物が現れる。

工事現場の電柱に抛りかかり寝ている、会社員風の男性に近づくと額に人差し指を着け、聞き取れない言葉を発する。

会社員風の男は一瞬、目を見開いた。

ローブを纏った人物は、満足そうに微笑むと、再び霧の中へと隠れて姿はそれっきり見えなくなった。

謎の人物が霧と共に去った後、会社員風の男は、静かに起き上がった。

そして激しく咆哮する。

男は、手元に転がっている鉄パイプを持つと、視点が定まらない空ろな瞳をして、覚束無い足取りで静かに歩き出した。

/

ヴェルフィーユは、異様な雰囲気を感じて目を覚ます。

「何？今何か、酷く嫌な感じがしたわ。もしかして・・・クロウ達に何あったんじゃない？」

目覚めたヴェルフィーユは、浮遊する様に急いで、階段を降りて行く。

階段を降りて行くと玄関が見えた。

玄関を背に細い廊下を浮遊する様に疾走する。

「クロウ、何処にいるの！」

焦る気持ちを抑え、クロウ達を探していると、右側の部屋から声が聞こえる。

ヴェルフィーユは、扉を通り抜ける。

「今晚から、明日にかけて雨が降る模様です。外出の際には傘を忘れないように気をつけて、お出かけ下さい。では、次のニュースです」

ヴェルフィーユは、四角い箱の中に居る小人を見て問いただす。
「ねえ、貴女、クロウ達を見なかった!」

焦る表情で、四角い箱に収められた、小人に話かける。

「質問に答えなさい!」

プツ――――!

小人は漆黒の闇に消えて行った。

「ちよつと、逃げるなんて卑怯よ!」

ヴェルフィーユが憤慨していると、背後から声が聞こえた。

「もう九郎ったら、テレビを消しなさいってあれ程言ったのに、

困った子ね。で、テレビを消し忘れた犯人は何処にいるのかな?」

ヴェルフィーユは呆気に囚われている。

「えっ・・・テレビ? 小人じゃないの?」

ヴェルフィーユは恥ずかしさの余り、俯き加減で頬が桜色に染まる。

「さつささ・・・最初から解かってたわ!」

呟きながら、クロウの母親に目を向ける。

クロウのは母親は、したり顔でこたつに近づくと、これでもか!

と言つ具合にこたつ布団をめくつた。

「ふふふつ! 犯人はここね!・・・あら?」

テレビを消し忘れた犯人は、コタツの中で気持ちよく眠っていた。

「もう! あれ程コタツの中で、寝ないように言ったのに。本当困

った子ね」

クロウの母親は、呆れた貌をしているが、顔の口角は上がっている。

当たり前のような親子の関係を見て、ヴェルフィーユは安堵の表情を浮かべ心を落ち着かせた。

クロウ母親は、壁掛け時計に見上げる。

「もう夜の11時なのね」

こたつからクロウを抱き起こすと、クロウを抱き抱え、階段へ向かい二階に上つてゆく。ヴェルフィーユも後を追うように一緒に

いていく。

階段を上がり、クロウを畳に寝かせると、押入れから布団を出し引き始める。クロウを見つめると独り呟いた。

「あの人が、居なくなつて7年も経つたね・・・本当に大きくなつたわね。私の大切な可愛い宝物」

クロウの母親は、愛おしそうに寝ているクロウ見つめている。

突然、下からガラスの割れる音が聞こえてくる。

クロウの母親とヴェルフィーユは、慌てて階段を降り様子を見に行くと、そこには、玄関を破壊し、片手に鉄パイプを携えた、空ろな目をした男が立っていた。

「クロス、クロス、クロスクロスクロス！」

呪文の様に唱えながら玄関から二階へ向かい歩きだす。

クロウの母親は急いで、階段を駆け上がる。

大きな物音に、目を覚ましたクロウは母親の元へと駆け寄る。

「おかーさん・・・」

クロウを抱き寄せ、覚悟を決めた顔で、静かに話し掛ける。

「九郎はいい子だから、お母さんの言う事、何があつても守れるわよね？」

「おかーさん。どうしたの？何かあつたの？」

「九郎、いい子だから聞いて！絶対に押入れから出たら駄目よ！いいわね!？」

「うん・・・」

クロウを抱え、押入れへ、急いでクロウを押し込むと男は階段を上がつて来て、静かにその姿を現す。

「何か家に御用かしら？こんな深夜にセールスなら間にあつてるわ！」

クロウの母親は気丈に立ち向かう。

男は、奇声をあげ咆哮する。

「どうやら、話の通じる相手じゃないみたいね・・・」

ヴェルフィーユは、どうにか助けようと、魔法を詠唱する。

「AKLH*SONG*+*JZIBSO*+*WIUNC*+*
ASPR***」

男に向かい魔法を放つ。男を通り抜け魔法は消えていく。

「クロウの過去に起きた事は、どうして変えられないの!? どうして! クロウには干渉できるのに!」

ヴェルフィーユは困惑し、絶望した。唯、黙って見ているしか出来ない自分に。

男は奇声をあげ、鉄パイプを大きく振り上げ、クロウの母親に襲い掛かる。

「こんな事したくないけど、少し痛い目見てもらうわよ!」

そう言い放つと、クロウの母親は男に向かい突っ込んでいく。

男が鉄パイプを振り下ろす、僅かな隙を突いて、一瞬で間合いを詰めると、男の顎を掌低で真上に打ち抜く。

異質な音と共に、男の顎は砕け、歯が飛び散る。

男は仰け反り、ゆっくりと、クロウの母親へと向き直す。振り下ろした鉄パイプを持ち直すと、片手でクロウの母親の首を掴み取り、軽々持ち上げた。

「うっ! なんて・・・怪力なの・・・もうこれは人間の力じゃないっ!」

クロウの母親を、壁向かい投げつける。壁に叩きつけられ崩れ落ちる。

「どう言う事?! 普通なら起つてられないわよ・・・」

その光景を襖の隙から見ていたクロウは、母親を助けようと出て行こうとする。それに気づいたクロウの母親は、悶え苦しみながら、クロウを凝視する。

? 絶対に出てきては駄目っ! 九郎!?

残酷なまでに瞳は告げていた。

ヴェルフィーユは、母親の視線に気づくと、素早く襖を通り抜け、クロウを抱き寄せた。

クロウの背後に周ると包み込む様に両目を覆い隠す。

「クロウ、見ては駄目！！」

男はゆっくりと母親に近づくと、カ一杯、鉄パイプを叩き付けると無惨にも男の手から、幾度も鉄パイプが振り下ろされる。

血が飛び散る音、骨が砕ける音を聞きながら、幼いクロウに分かることは、母親が、悲鳴一つ漏らす事なく死んだと言う事だった。

それは母親の自分への精一杯の思いやりだったのも分かっていた。クロウの母親が息絶えたのと同時に、男も糸が切れた人形のように、その場に倒れ込んだ。

ヴェルフィーユは、クロウを襖から向き直し見ると、そこには以前のクロウは居なかった。

「して・・・やる・・・ころ・・・して・・・やる・・・いつか絶対に僕の手で・・・殺してやる・・・」

空ろな瞳でヴェルフィーユを見上げる、瞳にはもう何も映ってなかった。

溜らずヴェルフィーユは、クロウを抱きしめると頬から涙を伝わせる。

「ごめん・・・なさい・・・何もしてあげられなくてごめんなさい・・・！」

クロウを抱きしめるヴェルフィーユは、突然。記憶の狭間へと吸い込まれいった。

内包する闇（前書き）

感想、指摘など、気軽にご意見頂ければありがたいです。

この物語はフィクションであり、作者自身、初めて書く作品ですの
で読んで下さる皆さんの意見をお聞かせ下さい。厳しい指摘も歓迎
しております。

内包する闇

惨劇の事件から10年と言う歳月が流れていた。幼い無力な男の子は、青年へと成長していた。

青年は、あの痛ましい出来事を、一度として忘れてはいなかった。寧ろ、あの出来事を糧に生きてきたと言っても過言ではないだろう。事件の後、青年は母方の祖父に預けられて育った。

当初、誰とも話さない少年を、祖父は厳しく育て上げた。ある時は真冬に外へ放り出し、井戸から汲んで来た冷水を浴びせたり、竹刀で叩いたりしてどうにか言う事を聞かせた。

抜け殻の様な少年を、見かねた祖父は自分の流派である居合を少年に教え込む事にした。

少年は、居合を習い始めてからと言うもの、一度として稽古を休む事は無かったのだ。自ら進んで稽古に明け暮れては、毎日深夜まで木刀を振り続けた。次日が休みならば、学校から帰宅すると、すぐに着替をすませ、明け方まで一心不乱に木刀を振り続けた。例えば雨の日や、台風の日で遭ろうとも絶対に休むと言う事はしなかったのだ。

常軌を逸した稽古の末、元来、青年が持っていた天賦の才を開花させる事になった。才能が開花すると青年は、祖父に実践での訓練を頼み込んだ。真剣での実践は危険だと判断した祖父は、条件を出す事にした。

居合大会に出る事を条件に、真剣での実践を許可したのだ。青年は二つ返事で承諾すると、居合大会へと進んで参加した。気が付けば、その道で青年を知らない人はいない位になっていた。

青年に取って大会で優勝する事は意味のない物となっていた。居合大会への参加、それは、復讐を成し遂げる為の通るべき道でしかなかったからだ。

一つの目的を達成するため、青年は己の全てを刀に捧げた。

どんな時も、青年の心は、平穩を取り戻す事はなかった。青年の心には、常にあの晩の出来事が渦巻いていたからだった。

「母さん……必ず、母さんを殺した奴をこの手で裁いて見せるから……」

青年はそう呟くと、祖父の家を出て学校に向かい歩き出す。いつもの見慣れた通学路。

周囲は、生徒の掛け声で賑やかに賑わっている、そんな事を気にも止めずに淡々と学校へ向かう。

学校と言う場所に関して言えば、青年は全く興味が無かった。ただ祖父が行けと言うので仕方なく行っていただけだった。青年からすれば、寧ろ、学校に使う時間を実践練習に使いたかったのだ。

それだけ青年にとって、学校なんてどうでもよかったのだ。学校の門を潜り、下駄箱へ向かう。

下駄箱を開けるとそこには、いつもの様に何通かの手紙が入っていた。

「毎度の事とは言え、いい加減にして欲しいな……色恋沙汰には興味が無いんだ」

青年はそう呟くと、手紙を持って教室へと向かう。

教室に入ると、真っ先にする事は、ゴミ箱の前に向かう事だった。そんな青年を見てか、皆好い印象はなかった。青年は学校で孤立していた。

誰とも話す事もなく、誰からも理解されない。青年にとってそれは当たり前前の事だったのだ。

いつしか生徒の間に噂が流れた。「面倒なことに巻き込まれたくないなら、綾瀬には近づくな」

生徒達の間ではすでに暗黙の了解になっていた。

午後の授業が終わり、青年は屋上に呼び出された。

屋上に行くと毎度の様に、不良達が青年を囲みこむ。

「おい！綾瀬、テメエ調子に乗ってんじゃねーよ！俺の妹の手紙捨てたんだってなあ！」

「手紙？ああ。下駄箱に入ってた手紙か、読まずに捨てたけど何か問題でもあるの？いつもの事だろ？」

「テメエ・・・俺の妹の気持ちを考えた事あんのか？今日こそは勘弁しねえ！」

「妹の気持ち？幹久の後ろにいる妹の事？用があるなら直接言うてくればいいじゃないか？」

幹久の妹の姿は不良達に紛れて確認できなかった。

「それができないのが女つてもんだろ？！お前は人の気持ちがわからねえのか？あ？」

「興味ないね。もういい？用がないなら帰るけど、あるなら早くしてくれないか？」

不良達は、完全に頭に来ていた様子だった。

「綾瀬、今回はかりは頭に來たぜ！ぶっ殺してやる！」

そう言うとき幹久は、ポケットからナイフを取り出し青年に突きつける。

「俺を殺すのか？君が？無理だよ、人を殺すのには覚悟がいる」

「うるせえー！」

ナイフを持って襲い掛かる、幹久の腕を掴み、力一杯握り込む。

「いつつてええ！放せ！コラ！」

「だから言っただろう？君じゃ俺を殺せないって、どうして解らないんだよ」

「人の命を奪うって事がどれだけ、重いことが解ってる？簡単に出来る事じゃないんだよ！」

そういうとき青年は踵を返し、教室へ向かおうと方向を変える。

幹久達は、背後から一斉に襲い掛かる。

次の瞬間、彼等は地面に倒れていた。

倒れこんだ幹久達は呻き声を上げて苦しんでいた。

「挑発したのはいいけど、呆気なさ過ぎて訓練にもならないな・・・

「・
・」
そういうと青年は階段を降りて行くとした。急に後ろから呼び止められる。

「綾瀬先輩！あのっ・・・そのですね・・・実は前から先輩の事が好きだったんです！私と付き合ってもらえませんか！」

声の主は可愛らしい女の子だった。

「ごめんね。君の気持ちには答える事ができないんだ、こんな俺の事好きになってくれてありがとうんだけど・・・」

「先輩、どうしてですか？他に好きな人がいるからですか？いるなら教えてください。私・・・先輩の事知りたいんです」

青年はゆっくりと女の子に近づくと耳元で囁く。

「俺の母親。十年前、殺人鬼に殺されたんだよ。俺は母親が殺される所を目の前で見ちゃったんだ。それからずっと母さんを殺した奴を探してる。だから・・・無理なんだよ。もう辞める事はできないから」

話を聞いた女の子はショックで声が出ない様子だった。

「酷い事言っでごめん。幹久が言った事は良く解ってる。本当、妹思いのお兄さんだね。こんな真直ぐな奴そういないよ。起きたら刃物は止めとけて伝えて伝えといってくれるかい？俺の様になったら戻れなくなるからさ」

そう女の子に託けると青年は階段を降りていった。残された女の子は、唯泣く事しか出来なかった。青年振られた事にはなく、冷たい態度ではあるけれど、他人を気遣う優しい心の持ち主。過剰なまで自分を責めて生きる青年を思うと涙が止まらなかったのだ。

/

青年は学校の正門を出て足早に家路に着こうとしていた。何かを思い出したかのようにヒタリと足を止める。ああ。そう言えば今日は新調してた武道着が出来上がってる日だったなあと呟いて踵を返

す。

歩いてきた道を逆に辿りながら駅の方へ向かう。

駅へ向かう途中、屋上であった幹久の妹とすれ違った。彼女は青年を見るなり、今にも泣き出しそうな瞳をし顔を伏せて駆けていった。

「随分と嫌われた物だなあ。近寄らなくなっていていいか・・・」

そして、何も見なかった様な顔をして駅へと歩みを進める。

駅に着くと学生やサラリーマン、OL等で混雑していた。青年は人込みを避けるように駅を通り抜け、ビルとビルの隙間の路地に足を踏み入れる。

新幹線が、頭上を通過する高架下は街の不良達の溜まり場となっていた。

知らずに足を踏み入れたのだろうか？

若い女性は、不良達に追いかけられているようだった。

女性は息を切らしながら、こちらに向かって駆け寄ってくる。

「助けて・・・お願いだから助けて！」

その顔からは、血の気が引き、蒼白く氷ついていた。

不良達は、女性に追いつくとまるで壊れた玩具のようにケタケタと笑う・・・

「残念でした！お姉さんは俺達と今から楽しいことする事が決定しちゃった！」

女性は、不良達に捕まり、路地裏へとその姿を消してゆく。

リーダー格の男が近づいてきて、青年を上から下まで舐める様に観察した後、獰猛に嗤う。

「お前も、見たからには同罪だな。ふーん、結構な美少年君だな。あっちの人に人気が出そうだ」

まるで子供が新しい玩具を、買ってもらったようにはしゃぐ、その姿は一般人ならば、戦慄を覚えただろうか。

だが青年にはこいつらの、異常さはまがい物にしか見えなかった。青年が黙って見るとリーダー格の男は、舌打ちをし数人仲間を

呼びつけた。

「普通、ビビッて土下座やら有り金出して、跪いて許しを乞うも
んだけどなあ。お前の眼はよあ。俺と同類の眼してやがるのに、自
分は特別みたいな眼しやがって、気にいらねえんだよ！」

あつと言つ間に青年は、四人に囲まれていた。

「少し、お仕置が必要だな！なあそう思うだろ、お前等もさあ
？」

リーダー格の男の問いかけに、仲間も嬉しそうにケタケタと嗤う。
一瞬、寒気がした。仲間の一人が、青年の背後からナイフで斬り
つけてきた。

青年は軽く受け流すと相手の腕を掴み、力一杯捻り投げる。

投げられた仲間は手首を押さえ、転がり泣き叫ぶ。

「腕があああああ！俺の手首折れてるう！！！」

もがき苦しむ仲間を見てか、数人の顔が硬直する。

「覚悟も無く刃物を持つ奴は、簡単にメツキが剥がれるな。そう
いう物を持つって事は、自分の命も天秤に賭けるって事だと解つて
る？」

「こいつ・・・イカレテやがる・・・」

リーダー格の男を除いて、囲んでいた不良達は、畏怖の眼で青年
を見つめ逃げ出した。

「チツ！腰貫け共が！お前の言う通り、半端な奴に人殺しは無理
だろうな。でも俺を連中と一緒にしてもらつと困るなあ。生憎、俺
はもう経験済みだ！！！」

リーダー格の男は、自慢そうに嗤うと臨戦態勢に入った。

そのスタイルを見て青年は言い切る。

「ボクサー崩れか・・・」

「ご明察！それから俺は、気が付けば、此処にいたってわけ！」

「事故で誤って人を殺したお前と一緒にするな。お前は逃げ出し
ただけだろう」

「知った風な口をほざくな！お前、もういいから死ね！」

リーダー格の男は、間合いを計る。

次の瞬間、男の左手からジャブが繰りだされる。

青年は手の甲でジャブを捌くと、男は、薄い笑みを浮かべ、即座に青年の顔面へ目掛け、親指を突き出した右ストレートを放った。が、男の放った右ストレートは空を切る。

「！！」

男が右ストレートを放った瞬間、体ごと男の間合いに入り込み、体を沈めると下から軽く体重を乗せ掌低で顎を打ち抜いた。

男が気が付いた時にはもう遅かった。体は宙に浮き、糸が切れた様にその場に沈み込む。男が沈み込んだ場所には鮮血で、小さな水溜りが出来上がっていく。

「ご丁寧にサミング付きか。気が付いたら前後の記憶は無いだろうけど、暫く寝てる」

女性が消えた、路地裏へ急いで走り出す。細い丁字型の路地裏を右に曲がると、やがて、突き当たりにぶつかった。

そこは死角になっていて人目につかない場所だった。

その隅に、数人の男達に囲まれ女性は居た。

見れば、服を破かれ何箇所か、肌が露出していた。男達は女性に馬乗りになり四肢を押さえつけていた。

すでに女性はに空ろな瞳で、空を見上げている。

その光景を眼の辺りににした青年は、今まで必死に押さえつけていた自分の中に潜む、黒い殺意に飲み込まれた。

理性と言う枷を忘れた殺意は、青年を闇へと引きずり込んだ。

馬乗りになった男へと、疾走すると背後から頭部に向けて中段蹴りを食らわす。

蹴られた男は吹き飛ばされ、ベシヤツ……と音を立て壁へ張り付くように崩れ落ちる。

最早、青年には相手の生死など関係なかった。

異変に気づいた男達は、次々とナイフや金属バットを持ち出し、青年に襲い掛かる。

男の一人が青年の胸部に向かってナイフを突き刺す。青年は素早く腰を少し下ろすと、左手で腕を掴み、捻ね上げると、右手で男の顎を真横に打ち抜く。

ナイフの男は吹き飛ばされるように転がり込むと微動だにしなくなった。

背後にいた男は、即座に金属バットを青年の頭へ打ち下ろす。

青年は一瞬で、右足を軸に左足を下げると、体を位置を素早く反転させる。金属バットは硬いアスファルトに叩きつけられた。

金属音が空気を伝い耳の奥まで響き渡る。

青年は瞬時に跳びあがると、相手の側頭部を目掛け、右足を振り下ろすと異質な鈍い音がした。

男はそのまま、眼から鮮血を流し崩れ落ちた。

青年を中心とした境界線の外側は、血の海と化していた・・・

やがて女性の瞳に、光が戻る。

周囲を見渡すと、先程まで自分を押さえつけていた男達が、鮮血に染まり倒れていた。

青年は、静かに女性に歩み寄ろうとした。カチカチと歯を震わせて女性は青年を拒絶する。

「来ないで・・・!!!」

鮮血の水溜りの中、青年は足を止める。

ピシヤリツ-----!!

青年は初めて気が付いた。自分の足元が血の湖になっている事に。女性が、恐怖するのもおかしくはなかった。

そこに居たのは先程までの青年ではなく、どこか殺人鬼の雰囲気漂よわせる・・・何かがあった。

女性の表情を視て。

正気を取り戻した青年は、静かに女性に近づくと上着を脱ぎ、露出した肌に学生服を纏わせた。

女性は、恐怖で凍り付いていた・・・

「同類か・・・」

一言呟くと、青年はその場を後にした。

慈悲と報復（前書き）

感想、指摘など、気軽にご意見頂ければありがたいです。

この物語はフィクションであり、作者自身、初めて書く作品ですの
で読んで下さる皆さんの意見をお聞かせ下さい。厳しい指摘も歓迎
しております。

慈悲と報復

その日の夕方、幹久は電話越しに妹に小言を言われていた。

「お兄ちゃん、本当に解ってるの？綾瀬先輩の事、悪く思わないですよ！」

「先輩は、お兄ちゃんの事を思ってたんだけだからね！それに私、お兄ちゃんに綾瀬先輩に暴力振るってなんて頼んでないんだから！解ってる？」

「ああ、解ってるって！こつちも忙しいだよ！もう切るからな？」
電話を切ると、幹久は無造作に携帯を上着のポケットにしまい込む。

口を開けば綾瀬、綾瀬と幹久は腹が立っていた。

「くそ！綾瀬の野郎！妹に心配掛けさすなよ！」

駅前を歩きながら、いつもの様に路地裏を奥に入っていくと、女性が壁の隅に持たれかかり震えていた。

幹久は何が起きたか理解できなかった。顔なじみの奴等が、血塗れで倒れていたからだだった。

「おい！しっかりしろ！生きてっか？」

その声に倒れていた奴等は何とか返事を返す。

「その声は・・・幹久か・・・俺等生きてる？」

「ああ・・・まあ骨は逝っちまってるかもな・・・それより何があつたんだよ！」

「・・・お前と同じ高校の・・・制服着た奴が、俺らをこつこつ風にしたんだよ・・・」

「なんでだよ！」

「俺等がそのねーちゃんと楽しもうとしてたらこつこつになった・・・アイツは完全に逝っちまってる！」

「馬鹿か？お前等何してんだよ！俺でも怒るぞ！ちょっと待てる。救急車すぐ呼ぶからよ！」

幹久は電話を取り出し急いで119番に電話掛ける。

「こちら119番、事件ですか？事故ですか？」

「ああ、事故。急いで宮寺駅の新幹線通ってる高架下まで来てもらえないっすか」

「了解、至急救急車を向かわせます」

幹久は、電話を切ると、女性が羽織ってる学生服に目がいく、女性に近づき話しかける。

「ねーちゃん、少し聞きたいんだけど、この上着着てた奴。どんな奴だった？」

女性は、幹久に対して脅えてるようだった。女性の気持ちを察して幹久は言葉を掛ける。

「安心しろよ、こいつらみたいにあんたをどうにかしようなんて全然ねーからよ」

その言葉に安心したのか、女性は幹久に事情を話し始めた。

/

「へえ。そう言う事が、まあこいつ等が一番わりーわな、でもねーちゃんも悪いんだぜ。この辺りはな、地元の奴なら絶対近寄らない場所なんだからよ」

「しかし、このまま行くと面倒な事になっちまうわなあ・・・どうすっかな？」

「ねーちゃん此処で見たことは全部忘れちまいなよ。面倒事に巻き込まれるの嫌だろう？」

そういうと女性は、黙って頷く。

「じゃあよ、今すぐ此処から離れる。と言ってもその格好じゃな・・・」

幹久は再び電話を取り出し、急いで知り合いに電話を掛ける。

「ああ、俺っス。事情説明してる暇ないんで、女物の服すぐ持って来てもらえます?」

程なくして一人の女性が鞆を携えやってきた。

「幹久。あんたに頼まれた服持って来たけど、こりやどうなってるんだい?」

「すいません、真菜さん。実は、こいつ等がその女性に暴行してたらしんですけど、返り討ちに遭っちゃったみたいで。面倒な事になる前に女性だけ逃がそうと思ってね」

女性は呆れたような顔をして、倒れてる連中を、一瞥する。

「当然の報いだね。寧ろこいつ等やった相手がどんな奴かは興味あるわ」

そう言つと真菜と言う女性は、幹久に鞆を投げて渡し、帰ろうとする。

「真菜さん、今度こいつ等返り討ちにした奴、紹介しますよ。真菜さん気に入ると思いますよ?」

そう言つと真菜は振り返り、嬉しそうな笑みを浮かべる。

「本当に!美少年?」

幹久は、顔を引きつらせる。

「ええ・・・まあ。ムカツク奴っすけど・・・その代わりと言っちゃなんすけど、この女性と一緒に目抜き通りまで出てもらえます?これから救急車来るんで」

真菜は二つ返事で承知すると幹久に向こう向いてなと眼で合図する。暫くすると女性は着替えが終わったようだった。

「おし!幹久!後頼んだよ。私はこの子を目抜き通りまで送るからさ。例の約束忘れんなよ!ああ!それと表でうちの組の馬鹿が倒れてたから下っ端に命令して、車で組まで運ばせといたから安心しな」

そう言つと真菜は喜び勇み、女性を連れ大通りに出て行った。

「真菜さんこの状況で嬉しそうだな。どういう神経してんだよ・・・」

「おい！お前等まだ生きてっか？」

「……おう……幹久……」

「なんだよ。気絶してたのか情けねーな！まあいいや、救急車来るまで暫く寝てるよ。あとよ、何聞かれても同士討ちって答えとけよ！真菜さん命令だかな！」

「おう……」

幹久は女性が置いていった学生服に眼をやる。学生服の裏には『綾瀬』と書いてあった。

「戻れなくなる……そう言うことか。あの馬鹿野郎！妹が泣いたらどうすんだよ！」

幹久がぼやいていると、表からサイレンの音が聞こえる。

「もう着やがったか。まあいい頃合いだな」

幹久は自分の着ている制服の下に、綾瀬の制服を着込み、上から自分の制服を着て覆い隠した。

「こいつ、本当に小っせいなあ。加えてあの顔じゃ妹じゃなくても惚れるわな」

救急車が到着すると、次々と怪我人が担架で運ばれていく。そのうち警察も来て、対応で幹久は忙しくなった。

夕闇が迫る頃、雑踏を覚束無い足取りで街を当てもなく徘徊する青年は、駅の方角に向かう救急車を見かけた。鼓動が早くなる。隠れるように、路地裏へと歩みを進めるとフェンスにもたれ掛かり、崩れ落ちる。

「俺は……彼等に……何をした……？」

青年は混乱していた。

青年がはつきり覚えている事は、女性が殺された母親と重なって見えた事だった。

あの光景を目の当りにした青年は、殺意に自我が飲み込まれて行

った感觸を思い出す。

恐ろしくなつて、齒がカチカチ、カチカチ、と鳴る。
いつまた正気を失うか解らない自分が、怖くて仕方なかった。

青年は、あの路地裏の事も、理解していた。 自分の中に内在する、抑えきれない衝動を、抑え込む為に、敢えて危険な場所を足を踏み入れていたのだ。少しでも渴きを潤す為に……

「感情を殺せ！……じゃないと潰れるのはお前だ！！」

そう自分に言い聞かせるとフェンスからゆっくりと起き上がる。そしてまた覚束無い足取りで、暗闇に点々と螢火を灯す街へと向かい歩き出した。

まるで、何かを求めるように街を彷徨う。青年の瞳にはすでに光がなく、死人の様な眼をしていた。

通りを行き交う群集の中、青年は大型家電スーパーの前で歩みを止める。

陳列されたテレビからは、夕方のニュースが流れていた。

雑踏の中、足を止めた青年は、ニュースが終わるまでテレビを呆と眺めていた。

「もう、戻れないか……いや元から戻る場所なんて俺にはなかったんだ……あの時からずっと」

感情の無い貌をし、静かに歩き出す。

もう何処へ向かうのか自分でも解らなかった……

それから青年は何処をどうあるいたのか覚えていない。

気が付けば、漆黒の闇に包まれた閑静な住宅街を歩いていた。

そして、意識を失い倒れた……

/

次に意識を取り戻したとき、ダンボールで出来た簡素なベットに寝ていた。

周辺を見渡すと、河川敷だった。外は雨が容赦なく打ち付けてい

た。

濡れない所をみると、どうやら高架下したの様だった。

「目が覚めたかい？」

薄汚い男が話しかけてきた。風貌から察するにホームレスだった。

「あなたが、俺を助けてくれたんですか？」

「ああ、驚いたよ。道路の真ん中で倒れてたからね……」

そう言うと男は焚き火に、拾ってきた小枝に投げ入れる。

「何か事情があるんだろうが、帰れる所があるのなら早く帰ったほうがいい……」

その言葉に、青年は言葉が出ない。

「……」

薄汚れた男は、小枝を投げ入れると静かに語りだした。

「こんな話がある、昔一人の男が、酒に酔って殺人を犯した話だ。酒に酔った男は、若い女性を鉄パイプで殺害した。それから刑務所に送られた。刑務所を出所した男が、その後知った事は、自分の家族が世間やマスコミ、親類縁者から蔑まれた後、自殺した事だった……」

「男は、当然の報いだと思った。人の命を奪ってしまったのだから……だが家族を巻き込んでしまった事、被害者の家族にも決して忘れる事のできない傷を負わせてしまった事を考えると男は死ねなかつた」

「その後、男は女性に男の子がいた事を知った……その後、男はその男の子を捜した……」

青年は、感情を押し殺し問いただす。

「その男は何処にいる……」

「君の目の前にいる」

青年は押し殺した感情を解き放つと薄汚れた男に飛び掛った。

「お前が母さんを殺したああ！！お前さえ居なければ……！！！！」

倒れこんだ男の襟を掴み、顔面を殴打する。そこには一匹の獣がいた。

幾度も、幾度も、叩きつける……

「殺してやるっ！！！！」

薄汚れた男は、夥しい（おびただしい）血を流し、意識が無かった。

青年が止めを刺そうと渾身の一撃を放つ刹那……

顔面に衝撃を受けて青年は転がっていく。

「何とか間にあつたかの……この馬鹿者が！！」

番傘を差して歩いてきた人物は、薄汚れた男を抱え上げ怪我の具合を見る。

「まあ何箇所か骨折れてるが命には問題はなかるうて。最後に一撃を貰つてたら死んでたじゃろうがな……」

静かに体を起こすと、青年は咆哮する。

「九郎、いい加減にせんか！事件の事はもう終わった事じゃ、早く忘れい！！」

「邪魔するな！！そいつは俺が殺すって決めたんだ！邪魔するなら爺さんでも許さねえ！」

そう言つと青年は祖父に殴りかかる。

祖父は、青年の拳を右手で円を描く様に払い上げる、体を崩された青年の顎を左手で真横に打ち抜くと瞬時に左手を引き、腰を下ろし、右手で顎を真上に打ち抜いた、そして浮き上がった側頭部に回し蹴りを叩き込んだ。

「やれやれ……怒りで戦い方すら忘れなんだわ」

青年はグシャリと音を立て地面転がり、這いつくばる。

「爺いさん……そいつは……俺が殺す……んだ……」

「九郎……もういいんじゃない……起つな……」

「嫌だ……そいつは俺が……！！」

「九郎！今のお前の姿を見て雪子はどう思うかわからんか！！」

「……」

「悲しいのはお前だけじゃない！ 儂も一度として忘れた事はない！ そして九郎、お前が殺そうとした男もまた苦しいじゃ……心優しいお前が一番よくわかつとろう！」

「爺さんは……そいつを……許せるのか？……俺は……そいつを殺したい……」

青年は、這いながら体を起こすとゆっくりと構える。

「小さな時から根性だけは、一流じゃな。全く面倒な事じゃて」
祖父はそう言うと、青年に襲い掛かった。

青年は、祖父の左拳を右手で払うと瞬時に五指を腕に掛ける、そのまま腕を捻り上げる、祖父はその場で一回転して捌くと左手を素早く引き抜く。

「九郎。儂の腕を折る気じゃったの。そんなにこの男が憎いか？」

「当たり前だ！ その為なら……」

「儂がお前に武道を教えたのはな、精神を養ってほしかったからじゃ。人を殺す様に教えたつもりは毛頭ないんじゃがな」

「……」

「お前の中には闇が潜んでおるの、暫くそいつと向き合ってみるとええじゃろうて」

そついうと祖父は踵を返し歩きだす。羽織から電話を取り出すと救急車を呼んだ様だった。

「爺さん……まだ話は終わって……ない！」

青年は疾走すると背を向けた、祖父に向かって中段蹴りを放った。祖父は右手で足を掴み取り脇に抱え込む、遠心力を乗せた左手で青年の顔に裏拳を放った。瞬時に抱え込んだ足を離す。

青年は顔面を殴られた勢いで転がり込んだ。

倒れた青年に祖父は語りかける。

「九郎、毎年、事件の日に雪子の墓前に花を添えてくれるのは

その男じゃよ。お盆もそうじゃ、墓前で涙を流しながらずっと謝る姿を、僕はこの目でみてきたんじゃ、それに比べてお前はとうじゃ？墓前にも顔を出さず、復讐の為に、毎日明け方まで稽古しては飯も食わずに寝るだけじゃろう」

「俺は、母さんの為に！」

祖父は呆れた顔をして言い放つ。

「九郎は勘違いしとるの？雪子がいつそんな事頼んだ？」

「……」

「兎に角、一旦この男の話を聞いて見る事じゃな、そこから見て来る物もあるうて」

祖父はそう告げると、到着した救急車に男の付き添いとして乗り込む。

残された青年は、母親が亡くなって以来、その晩初めて泣き叫んだ。

実休光忠と母の残り香（前書き）

感想、指摘など、気軽にご意見頂ければありがたいです。

この物語はフィクションであり、作者自身、初めて書く作品ですの
で読んで下さる皆さんの意見をお聞かせ下さい。厳しい指摘も歓迎
しております。

実休光忠と母の残り香

青年が、母親を失ってから初めて泣いた夜から、数日がたった。

あの日の晩から刀を振るう事を止め、右手に刀を握り、壁にもたれ掛かりながら、膝を抱え、自室に籠っていた。

「爺さんが止めてくれなかったら、きっと俺はアイツを殺していた。アイツは無抵抗だった。俺が母さんの子だと知っていたんだ・・・」

青年は刀を見つめながら、祖父が言ったことを口にする。

「俺に武道を教えたのは、人殺しをさせる為でなく、精神を養って貰う為か・・・」

青年はその言葉を、口にしながら呟く。

「アイツを許せない、今でもそう思う。だけどアイツは母さんの墓前に毎年、花を供えて墓前で泣いて謝っていた。アイツにだって家族がいたんだ。俺は母さんが死んでから、一度も墓に出向いたこととは無かった。唯、復讐の為にひたすら技術を磨くだけで、結局、目的の為に武術を利用したんだ・・・」

「俺が本当に許せなかったのは、無力な俺自身だったのかも知れない・・・他人と接触を拒んできたのも自分が嫌で・・・仕方なかったんだ。母さんの死から逃げて、爺さんの武道を踏みにじり、他人を傷つけて・・・逃げていたのは結局俺か・・・最低だな・・・」
青年はそう呟くと刀を壁に投げつけた。刀は重い金属音を響かせて壁から転がり落ちた。

「アイツを殺してたら、きっとアイツと同じ苦しみを背負ってた。爺さんはそれを俺にさせまいと止めにきたんだ・・・きっと母さんがそんな事望んでないと解ってたから・・・間違ってたのは、俺の方だったんだ・・・」

そう言うと静かに立ち上がり障子を開け、部屋を出る。

青年は、コの字型の長い縁側を歩き出すと、居間へと向かう。居間にたどり着くと中から話し声が聞こえてきた。

「爺さん、話がある・・・」

青年の声を聞き、祖父は青年を招き寄せる。

「丁度いい所へきたな。九郎、中に入ってきてなさい」

障子を開けると青年の眼に見知らぬ顔と馴染みのある顔が眼にはいつてきた。

「幹久・・・どうして此処にいるんだよ・・・」

幹久は、困惑した顔で青年をみた。

祖父は青年に座れと指示した後、見知らぬ顔の女性と話をしているようだった。

「うちの孫がお宅の、若い衆に手を出したそうで、本当に申し訳ない。手前にできる事なら出来る範囲で差せていただきたい」

若い女性は祖父に向かい話し掛ける。

「お気持ちはありがたいのですが、今回の一件に関して、私共は責任を取ってもらうつもりは毛頭ありません。非はこちらにありますし、うちでも扱いに困つた輩なので、お灸を添えて貰つていい仕置きになりましたわ」

祖父は困惑した顔で話を続ける。

「しかし、治療費などもお宅に振りかかるとは納得しづらい。何か出来る事があるのなら言つて頂きたい」

若い女性は、祖父に向かい話を続ける。

「高名な綾瀬家当主の方に、そこまでさせる訳にはいきませんわ。唯、うちの輩を叩きのめした人物にお会いしたくて参上した次第ですわ」

「・・・だそうだ。九郎挨拶せぬか」

祖父の言葉に若い女性がこちらに向き直す。背中まで届く長い黒

髪に、大きな瞳、凜とした佇まいを醸し出している。その女性の眼は、青年には何処か嬉しそうに見えた。

「只今、ご紹介に預かりました。綾瀬九郎と申します。今回の不始末、誠に申し訳ありません・・・」

女性はうつとりした顔で青年に話し掛ける。

「宮路 真菜と申します。ねえ九郎君、お姉さんと立ち合ってもらえないかしら。それで今回の事は両成敗って事でお願ひしたいのだけど」

青年が祖父に眼をやると、祖父は頷いた。

「解りました。では道場の方へ移動して頂けますか・・・」

祖父は門弟を呼び出し案内するように命じた。

居間に祖父を残し、門弟の後ろに付き居間を出て縁側を歩き道場に足を向ける。

道場に向かう途中、後ろからひそひそと、話し声が聞こえた。どうやら幹久と真菜と言う人は話してる様子だった。

「ちよつと、幹久。九郎君凄く可愛いじゃない！幹久・・・ゾクゾクしてきたわ」

幹久は冷たい視線で真菜を見ると呆れた顔をする。

「真菜さん、綾瀬は強いツスよ・・・真菜さんでも勝てないかも」
幹久の言葉に真菜は眼を輝かせる。

「強ければ強いほどいいわ！屈服させがいがあるもの！あんな可愛い子が辛そうな貌してるの想像しただけで凄く・・・興奮しちゃう！」

青年は後ろが騒がしいと思ひながら、渡り廊下を抜け、道場にたどり着く。

「道場はこちらです、どうぞ中へ」

門弟が道場の扉を開けると一様に道場へと歩みを進める。

門弟は真菜に近づき案内する。

「奥に着替える場所があるので、そちらをお使い下さい」

「必要ないわ、すぐ終わらせるから」

門弟にそう告げると、壁に掛けてある木刀を二本取り青年へ一本放り投げた。

道場の隅にポツンと残された幹久は溜息をつく。

「何だってこんな事に付き合わないといけないんだよ……」

「九郎君、準備は出来てるわ、早くしましょ！」

門弟を挟んで、互いに中央に歩みを進める。

そして火蓋は切つて落とされた。

「勝敗は先に二本先取した者とします。両者、互いに礼！始め！」

門弟の掛け声が道場内に響き渡る。先陣を切ったのは真菜だった。

真菜は下段に構えると瞬時に疾走し、青年に向かい切り上げる。

「無拍子か、相当な物だな……」

青年は瞬時に体を反り交わすと、右足を軸に反転し下段から真菜の首元に木刀を突きつけた。

「一本！」

真菜は驚きを隠せなかった、真菜とて素人ではなかったからだつた。

「なんて子なの……紙一重で捌くなんて……これでも私、剣道、十段よ！」

内心そう思いながらも次こそは、取ってみせると躍起になっていた。

互いに中央に戻り、両者、正眼に構えると切先の攻防を繰り広げながらも先に仕掛けたのは、青年の方だった。

縫い込む様に真菜の木刀を伝い青年の木刀は真菜の胸に突き刺さる手前で止められた。

「一本！それまで！勝者、綾瀬師範代！」

真菜は愕然としていた……

かつて神童と言われた真菜でさえ青年に敵わなかったのだ。

「驚きました……その若さで相当な腕前ですね」

「正直に話すとね私、剣道十段なの。剣道最高位の私をあしらうなんて九郎君、居合何段なの？」

「初段です」

「初段！？その強さで初段ってどういうつもりかしら！実力だけなら範士八段は優に超えてるわよ！」

「大会では祖父の影響もあつて特例で審査して頂いてるんです。

段位を取るつもりは始めから毛頭ないんです。優勝もしてますがマスコミ各社には、祖父が圧力掛けてるので一般には知られて無いです」

「本当は貴方を叩きのめすつもりできたんだけど、うちの組員が容易にやられた理由がわかったわ。正に天賦の才ね」

「そんな格好の良い物じゃありませんよ・・・」

「どうして？」

「・・・」

「言いたくないならいいわ。兎に角、完敗よ！何かあつたらうちの組にいらつしやい、世話してあげるから」

「幹久、帰るわよ！」

真菜は道場を出て行った。

慌てて幹久も後を追う、何か思い出したように戻ってくると制服の上着を投げつけて話しかけてきた。

「面倒かけんなよ！路地裏での事、始末するのに大変だったんだからな！！妹に感謝しろよ！」

そういうと真菜を追いかけて走り出そうとする幹久を青年は呼びとめた。

「幹久、済まない・・・」

「勘違いするなよ！妹の為だからな！」

青年を背を向けたまま、言葉を返すと、急いで真菜の後を追い走っていった。

/

帰りの車内での事。

真菜は勝負に負けたにも関わらず惚けていた。そんな様子を見てか幹久が真菜に問い直す。

「真菜さん・・・何呆けてんスか？・・・まさか・・・」

「九郎君って可愛い上に、強いよね。多少影はあるけど、沖田総司みたいでカッコイイ！」

幹久は顔は引きつっていた・・・こうなる予感はしてたからだ。

「綾瀬。真菜さんまで手玉に取るとは・・・しかし、あの綾瀬が俺にお礼を述べるとはな、そっちの方が俺には事件だけどねえ・・・」

真菜は決意したように幹久に命令する。

「幹久帰ったらすぐ、各組長に電話しなさい！今後、綾瀬九郎に手を出す様な事したらこの私が許さないって伝えておきなさい！」

幹久はうな垂れながら小声で返事をした。

「組長って・・・俺の精神的負担凄いですけど真菜さん・・・！？」

真菜は幹久の言葉を聞き流すと、真面目な面持ちで車内から空を仰ぐ。

「九郎君は欲がなさ過ぎる。人が成長していく過程で必ず出てくる物を持ち合わせてないなんて、異常だわ」

青年は着替えを済ませると祖父のいる居間に足を向ける。

渡り廊下を抜け、縁側を通り居間にたどり着くと襖越しに祖父に話し掛ける。

「爺さん、大事な話があるんだ・・・」

「入ってこい」

青年が襖を開けると、祖父は大きな座卓でお茶を飲んでいた。

「で・・・どうじゃった？あの女子おんなは帰ったんじゃろう？」

「ああ・・・動きに無駄が無かった」

「そうか。で、話はなにかの？」

「爺さん、まだはつきりと答えは出て無いけど、爺さんが俺を止めてくれた事、武道を利用した事、爺さんが俺を止めてくれた事。自分が間違っていた事、その意味が解ったから・・・刀を置く事にする・・・」

「そうか・・・そこまで解ってるのなら後はお前次第じゃの。九郎ついて来い」

祖父はおもむろに立ち上がり、居間を出ると縁側を通り、中庭を抜け、離れ座敷に向かう。

離れ座敷前に着くと羽織からレトロな鍵をを取り出すと鍵を開ける。

音を立てて扉が開いた、随分使われてないようだった。

中に入ると部屋は刀の宝庫だった。刀は木箱に入れられ綺麗に整理され積まれていた。

「爺さんここって・・・」

「うちが所有してる刀の倉じゃって、先祖代々集めてきた縁の品じやな」

「へえ。家の家系ってそんなに長いの？」

その言葉に祖父は呆れた顔をする。

「まあな、お前は物に執着もなければ、此処に来てからも強くなること意外に興味を持たなかったから知らぬだろうがの、四百年は歴史がある家系じゃって、初代当主、姫忠から始まった由所ある家系らしいがの。まあ本当かどうかは知らないがな、かの織田信長と縁があつたと言われておる」

自慢そうな顔で講釈を述べる祖父の姿に青年は呆れかえる。

「そんなの迷信だろ」

青年は数ある木箱を無造作に手に取ると漆黒の鞘に収まった刀を取り出し、引き抜いた。

「こんな変哲の無い刀、刀剣愛好家の家になら何処でもあるだろう?」

祖父は驚いた顔をして青年に詰め寄る。

「九郎! その刀どうやって抜いたんじゃ!」

「いや普通に抜けるだろ? 刀なんだから・・・」

「そうじゃないわい! ちよつと見せてみい!」

祖父は刀を見るや否や解体し始める、刀身には『じっきゅうみつただ実休光忠』と掘り込まれていた。

青ざめた顔をし祖父は青年に向かい、顔を上げる。

「この刀は持ち主を選ぶ刀なんじゃ! 儂も若い頃そう言われて試したことがある、だが儂には抜けなかつたんじゃよ」

「爺さんがそこまで言うなら今抜いてみたらどうなんだよ・・・」
青年は祖父から刀を取り上げると鞘に刀を納刀し、手渡した。

祖父は鞘から刀を抜こうとしたが、鞘から刀が抜けることはなかった。その様子を見て青年は祖父を疑いの眼で見た。

「爺さん、芝居じゃないだろうな?」

「馬鹿を言え! 芝居でこんな莫迦な真似をするか!」

青年は祖父から再び刀を無造作に取り上げて、怪しげに見つめる。
「爺さんの言う事が本当だとして、どうして作りが新刀なんだよ? 信長が実在した時代なら古刀が主流だろう? それに鞘だつて鉄拵えだけど普通の鞘じゃないか、霸王か魔王か分からないけどそういう人物が持つならもつと派手じゃないのか?」

その言葉に祖父は静かに語りだした。

「それはの九郎、その刀を持つものは世の中を統べると信じられているからじゃ。かの太閤秀吉もその刀を倉に納めておいた品物じゃ。扱えなかつたのか知らぬが、一説には家康もその刀を欲したらしい、それが世に言う『大阪夏の陣』じゃ。結局刀は家康の手には渡らずじまいじゃつたがの、ご先祖様が刀を焼き直して見た目では分からぬように仕向けて持ち出したとの事らしいがの、それからず

つとこの倉に眠っておったんじゃよ」

全く信じてない顔で青年は、祖父に質問を投げかける。

「爺さん、その曰くつきの刀がなんで俺に抜けるんだよ？」

「知らぬわ！刀が持ち主を選ぶというたじやろう！まあそう言う事じゃて・・・その刀はお前が持つておけ！どうせお前にしか使いこなせない品物じゃ」

祖父は肩を落として刀部屋から奥に歩き出した。奥には古い階段があつた。

祖父に連れられて階段を上がると甘い香りが微かに漂つてきた。

何処かで嗅いだことのある匂いに青年は懐かしく感じた。

二階全体が部屋になっていて随分と広かつた、レトロな机に寝台衣桁いこうには真紅の和服が掛けられていて、和洋折衷な部屋だった。

「爺さんこの部屋って・・・」

「雪子の部屋じゃよ」

「・・・」

「九郎、今日からこの部屋を使え。今のお前には良い所じやろうて、此処で心を休めろ」

そついうと祖父は青年に鍵を渡し階段を降りて行った。

複雑な思いで刀を置き、青年はベットに、くの字型に横たわると
瞼を閉じる。

「懐かしい母さんの匂い・・・好い匂いがする・・・」

まどろみの中、青年の意識は薄れていった。

漆黒の悪意（前書き）

感想、指摘など、気軽にご意見頂ければありがたいです。

この物語はフィクションであり、作者自身、初めて書く作品ですの
で読んで下さる皆さんの意見をお聞かせ下さい。厳しい指摘も歓迎
しております。

漆黒の悪意

青年はその晩、久々に好い夢をみた。幼い自分を抱えて微笑む母さんの隣に、誰か寄り添っている。

その顔は、雲の様な霧が掛かっかけていて見えなかった。本当に幸せそうに笑う母さんが印象的だった。

「母さん……」

寝ている青年の眼から雫が零れ落ちた。

翌朝、甘い匂いに包まれて目が覚めた。母さんが使っていた部屋をみると、ピンクのカーテン、白いテーブル、ベットの脇にはクマのぬいぐるみ。いかにも女の子らしい部屋だった。母さんが自分とそう変わらない年齢に使ってた部屋だと思うと、複雑な気持ちになった。

起き上がると部屋を出て、母屋お母やに足を向ける。母屋に入ると直接、居間へと向かった。

障子を開けて中にはいると祖父が朝食を食べ終えた様だった、お茶を啜すすりながら、祖父が話しかけてきた。

「九郎、解っておろう？」

「ああ……」

この何日か疑問に思っていたことを問いかける。

「なあ、爺さん聞きたいことがある。あの時なんで俺の居場所がわかった？」

「携帯電話のGPS機能じゃよ。お前が帰って来んでな、心配して武道具屋に電話してみればまだ来てないと言われたわい。そこに幹久君から電話があつてな、心配して見に行けば案の定じゃったわい」

「爺さんはアイツがあそこに居るって知ってたのか？」

「大分前からの・・・お前に教えるところくな事にならんと解つていたからの、お前には黙っておいたがな」

「・・・アイツが入院している病院と母さんの墓の場所教えてくれ」

そう言うと祖父は黙って二枚のメモ用紙を青年に渡し居間を出て行った。

青年は足早に自室へ戻ると、仕度をすませてと玄関へと向かう。玄関で靴を履き、離れへと向かった。

部屋に入るとクローゼットを開ける。様々なマフラーがあった。そこから紺色のマフラーを手に取る。

「母さん、借りていくよ。きつと俺はアイツを見たら自分を保てなくなるから・・・」

マフラーを首に巻くと、甘い香りがした。離れを後にすると、門へと向かい、外へ出る。

屋敷から出ると石畳が道路へ延びていた、青年は道路に向かい歩き出す。道路に出ると、祖父に貰ったメモ用紙を見ながら登り坂を歩き出した。十分程度登ると寺が見えてくる。

「ここか、結構近い場所にあつたんだな・・・まあ今まで爺さんに聞いたこともなかったからな・・・」

寺の入り口を通り抜け墓地へと足を踏み入れる。墓地は人の出入りを拒むように四方を石垣で覆っていた。まるで人の出入りを拒むような墓で覆われた迷路の道をメモを頼り探していくと、古い墓標があつた。そこには安達六郎姫忠の名前も記されていた。

「これが、先祖代々の墓か、初めての墓参りが母さんの墓参りなんて滑稽こっけいだな・・・」

青年は墓の前に座り静かに手を併せる。

暫く眼を閉じ拝んでいると、人の足音が聞こえた。砂利を踏む音が近づいてくる。

砂利の音は青年の後ろで鳴り止んだ。

疑問に思い振り返るとそこには、顔を包帯だらけの男が佇んでいる

た。

「……こつちから会いに行く手間が省けてよかったよ、行きたくもなかったしな！こんな所に何の様だ！」

青年の顔は憎しみで覆われていた、今にも飛び掛りそうな程の醜悪な顔をしているのに自分でも気が付いていた。

包帯だらけの男は膝を付き、頭を垂れ涙ながらに訴える。

「どうか墓前に手を拝ませて下さい……どうかお願いします……」

「帰れよ！此処はアンタが来る場所じゃないんだよっ！！」

青年はそう言うのと睨みつけ、片手でマフラーを握り締める。

「そっちはアンタ家族がいたんだっただな！そっちの墓参りはいいのかよ！こんな所に来る位なら自分の家族の墓参りに行けよ！！」

男は心臓を握りつぶしたような苦悶の表情を浮かべ、静かに語りだした。

「私は……身内から籍を抜かれ帰る場所が無い人間です。家族の墓にも行きたいのですが、二度と参る事が叶わないのです、此処に居るのは行き場の無くなった唯の死人です。死人に出来るのは被害者の方に償う事しか出来ないのです……」

男は頭を伏せたまま微動だにしない。

青年は祖父から言われた言葉を思い出し、怒りを押さえつけながら問いかける。

「爺さんから、アンタの話を聞けって言われたからあの晩の事を少しだけ聞いてやるよ」

男は顔を伏せたまま語りだした。

「あの晩私は、会社の同僚と酒を酌み交わし、帰路に着いていました。電柱にもたれ掛かりつい眠ってしまったのです、まどろみの中、周囲は濃い霧で覆われ黒いローブを纏った人物が、私の額に人差し指をつけ聞き取れない言語を口にしたのを覚えていますが、そのあと気が付いたら……血の海に倒れていたのです……警察に話したのですが信じてはもらえませんでした」

青年の顔は酷く歪んでいた。

「そんな莫迦みたいな話を俺に信じろというのか？ 爺さんに言われて話を聞いた方がいいが、莫迦らしくて耳が腐り落ちそうだ。俺は今すぐアンタを殺してたい！」

「私も最初は、彼方に殺されるつもりでした。でも考え直して思ったのです、彼方が私を殺したら今度は彼方が苦しむ事になると・・・そんな思いをするのは私一人で十分だと、事情はどうあれ人を殺めた事は事実なのでから・・・彼方にそんな思いをさせる事は絶対にできません・・・」

「ふざけるな・・・俺の気持ちはどうなる！ 母さんを奪われた俺の気持ちは何処にぶつけなければいいんだよ！」

青年は我慢できなくなつて男の頭目掛け蹴り上げる瞬間。

「九郎・・・その人を許してあげなさい・・・」

一瞬、青年の耳に母親の優しい声が聞こえた様な気がした。

驚きの余り、足が止まる。気が付けば青年から殺意は消えていた。青年は男を無視し来た道に戻っていく。途中で足を止め背中越しに男に話し掛ける。

「アンタ・・・行く所ないんだって言ってたな、此処の坊さん知り合いだから母さんの為を思うなら一生此処で母さんや無縁仏の供養に残りの人生掛けて償え、それで許してやる・・・但し一日でも怠つたらその時はアンタを殺す」

男は驚きを隠せない表情をしていた、その顔からは涙が滝のように零れ落ちていた。

「アンタが言った事、正しいよ、俺もここ数日考えて気づいたからさ・・・あと怪我が治るまで無理するな」

男は泣き崩れ、悲鳴に似た声で叫んだ。

/

それから毎日の様に、青年は深夜に墓に出かけては手を合わせていた。綺麗に墓は手入れされていた。

「・・・これでよかつたんだよな・・・母さん」
そう呟くと自宅に向かい歩き出す、そんな日々の繰り返しが日課
になっていた。

半年が過ぎた頃だろうか。深夜に目が覚め寝付けない青年は久々に刀を持って道場に向かつていた。

辺りは霧に包まれ、いつもと違う雰囲気嫌な気配がした青年は墓へと走り出した。

坂道を登り終え、墓で埋め尽くされた迷路のような道を駆け走る。そこで青年はとんでもない物を目の当りにする。

母親を殺した男が古い壺を、全身黒いフードを纏った人物に手渡ししていたのだ。

黒いフードの人物は微かに嗤うと聞き取れない言語の呪文を唱えだした。

唱え終えた瞬間、母親を殺した男は塵になつて跡形も無く消えていった。

その光景を目の当りにした青年は、憎しみを露にした。それで全て理解できたからだつた。

「お前が全ての元凶か！何者だ！」
携えた刀を持って疾風の如く黒いフードの人物に襲い掛かる。

瞬時に間合いを詰めると鞘から刀を引き抜き横一文字に切りつける。

黒いフードの人物は後方に下がり紙一重で交わすと不気味に嗤う。青年は間髪居れずに刀を上段に持ち直すと、黒いフードの人物に

向かい一気に振り下ろす。
刀が黒いフードの人物に届く瞬間、男の頭上に魔方陣が広がり遮

られた。

「くそっ！なんで届かない！！！」

黒いフードの人物は青年の額に手を翳す（かざす）と口角をあげ嗤った。

「いずれ解る・・・」

黒いフードの人物は見下すように嗤うとそのまま黒い霧の中に吸い込まれていった。

「待てっ!!!」

残された青年は、悔しさの余り悲痛な叫び声を上げた。

/

失意の内に自宅に帰った青年は、ベットに横になり深い眠りついていた。

翌朝目覚めると、逸早く祖父の元に向かい昨夜の出来事を伝えると、すぐに祖父と墓地に向かい走り出した。墓に到着すると納骨されていた骨壺が一つ少ない事に祖父が気が付いた。

「九郎・・・雪子の骨壺は無事じゃったが、安達六郎姫忠の骨壺がなくなつとる・・・何に使うか解らぬが不味い事になったの・・・」

┌

「爺さん、アレはもう人間じゃない・・・人以外の何かだ」

「お前がそこまで言う相手じゃ恐らく・・・人ではないかもしれぬな」

「九郎、お前はもっと強くならねばならん！今日から寝る間も惜しんで実践での稽古を行う・・・わかつたの」

「ああ、今度は逃がさない・・・」

それから、数ヶ月なんの進展も無く、稽古に明け暮れる日々が続いた。

次第にアレは夢だったのではないかと思いはじめていた。その内行き場の無い憎しみの矛先は自分に向けられるようになっていった。

そして居合大会を迎える日に至る事になった。

黒騎士と緑の騎士（前書き）

感想、指摘など、気軽にご意見頂ければありがたいです。

この物語はフィクションであり、作者自身、初めて書く作品ですの
で読んで下さる皆さんの意見をお聞かせ下さい。厳しい指摘も歓迎
しております。

黒騎士と緑の騎士

気が付けばクロウは、真赤な絨毯で敷き詰められた、聖堂の中にうつ伏せで倒れ込んでいた。

周囲を見渡してみると、色取り取りのステンドグラスに、一二本の支柱、両側には銀で出来た甲冑が剣を胸に抱き、支柱に沿って起っている豪華な聖堂だった。聖堂の奥には玉座があり黒い甲冑が剣を胸に抱き鎮座していた。

玉座の後ろには十字架が吊るされていた、人の形をした白くて、床にまで届きそうな位の金糸が十字架から零れ落ちていた。四肢は鎖で固定されていた。

「！！！！」

クロウは驚いた、はらうけ磔られた人物に見覚えがあったからだだった。

「ヴェルフィーユ！」

急いで十字架に駆け寄る、玉座の前を通り過ぎようとした時、黒い甲冑は動き出し、剣をクロウに向けて横一文字に斬りつけた。

不意を付かれたクロウは、首を反らし交わすが剣は頬を翳め、血が溢れ出す。

すぐに間合いを取り、臨戦態勢に入る。

「何者だ！答える！」

クロウの問いかけを無視し、黒騎士は剣を振り上げると襲い掛かる。

「聞き耳持たずか・・・」

振り上げられた剣は異常な速度でクロウに目掛け振り掛かる。

驚くスピードで振り下ろされた剣を避けきれないと判断したクロウは、強引に間合いに詰め寄り両手で黒騎士の柄を力一杯握り締める。

剣はクロウの頭を翳め、頭から生暖かい鮮血の雫が伝わり落ちる。「くそっ！なんて莫迦力だっ！ガウエイン並みか、おまけに剣撃

はランスロットに近い速さか」

黒騎士はさらに力を増し、クロウは片膝を付くほどだった、このまま行けば完全に押し切られてしまうのは明白だった。

「どうする・・・どうしたらいい・・・考える」

すでにクロウの腕は限界だった、もう駄目だと観念した時、ヴェルフィーユの声が聞こえた。

「クロウ、その黒騎士を殺しなさい。それは貴方自身の力の源なの！そいつを殺さないで此処から出られないの！」

その言葉にクロウは、我に返り瞬時に黒騎士に向かい腹部に足を掛けるとそのまま後方に投げつける。

勢いよく黒騎士はクロウの頭上を弧を描くように転がった。

その隙をつき、銀の甲冑が抱え込んでいる剣を手に取ると、黒騎士を迎え撃つ。

起き上がった黒騎士は疾走すると瞬時にクロウの間合いに入り込んだ。

「まずい！・・・こいつは俺より数段強い！」

意表を付かれたクロウに向かい、黒騎士の剣は下段から天に向かいクロウの左腕を根元から叩き落した。

クロウの左腕から夥しい血が噴出す、苦悶の表情を浮かべ片膝を付いた。

「そうだ、平伏しろ・・・貴様にはその姿がお似合いだ・・・」

初めて口を開いた黒騎士の声に驚きを隠せない。

「お前は・・・まさか・・・俺なのか」

「そうだ、俺はお前だった・・・だがお前に俺が取って代わる」

「お前は何もできない、だから俺がお前の代わりにこの世を統べる！」

「あの時の黒い闇か・・・」

互いに言葉を交わしえると、黒騎士はクロウに向かい止めを刺そ

うと頭上へと剣を振り下ろした。

クロウは覚悟を決めると、片手で剣を受け止め力一杯防ぐ、しかし片手ではどうにもならない事はクロウにもわかっていた。瞬時に力を抜くと黒騎士の剣の沿って柄頭を、黒騎士の顔面に叩きつける。意表をつかれた黒騎士は、若干揺らいだ瞬間をクロウは見逃さなかつた。

瞬時に左足を下げ捻ると右足で渾身の蹴りで胴体を打ち抜く。

そのまま黒騎士は勢いよく吹き飛んでいった。

「クロウ、今がチャンスよ。早く止めを刺しなさい！」

クロウは持っている剣をヴェルフィーユの心臓に向けて投げ放つた。

投げた剣は深々とヴェルフィーユの心臓に突き刺さる。心臓から溢れ出た血は剣伝い床を真赤に染上げる。

「クロウ、どうして・・・」

「お前に用はない！」

クロウはもう迷いが無かつた。山水の様に澄み切つた透明な瞳をしていた。

黒騎士はむくりと起きあがると、疾風の速さで、剣を水平に構えクロウを向かつて突き刺した。

貫かれたクロウは、平然として黒騎士を抱きしめる。

「お前は、小さな俺だつたんだ、今の俺ならきつと助ける事ができる。お前もヴェルフィーユも・・・だから安心して俺の中に戻れ・・・」

優しく語り掛けるクロウに黒騎士は子供に変わると涙を流し、散々泣きじゃくつた後、クロウに抱きつきながらそのまま体に戻つていった。

十字架に磔られたヴェルフィーユは怒りを露にする

「どうして、解つた?!」

「ヴェルフィーユは間違つても殺せなんて言葉は口にしないからだ！」

「たつたそれだけの事で剣を差し向けたか？」

「ああ、アンタが何者かも大体想像出来る」

ヴェルフィーユを模つた人物は鎖を引き千切ると、悠々と降り立つ。こちらに向かいながら、徐々に緑の騎士へと姿を変えた。クロウは背中越しに緑の騎士と対峙する

「さすがと言うべきかな・・・あの方が目を付けるのも頷ける」

「あの方つて言うのは黒いフードを被つた奴の事だろ？」

「さてな・・・それはお前の知る事ではない」

「まあいい、アンタが知つていようとしまいと自分で探し出すさ。一つアンタに予言をしておこうか。アンタは絶対俺には勝てないし此処で滅ぶつて事だけは確かだ」

そう言い放つたクロウは振り返ると緑の騎士を睨みつける。

「片腕で戯言を言つてくれる」

「アンタ如き片腕で十分なんだよ」

緑の騎士は怒りクロウに襲い掛かった。

次の瞬間、クロウは脱兎の如く逃げ出した。

「ふん、大口を叩く割には逃げるのか。臆病者め！」

クロウは走りながら考える。全身鎧だと日本刀でもなければ一撃では無理だ。

剣は甲冑が抱えてる物を使うとしても・・・そうだアレならいけるかも？

但し失敗すれば命は無いだろ。その為には偽装が必要だ。そう考えたクロウは走りながら、銀の甲冑から剣を五本程拝借する事に決めた。

一本、二本、三本、四本、五本。逃げながら巧に剣を無造作かつ正確に円を描き、床に突き刺していく。

舞台は整つた。クロウは剣の中央に立ち、緑の騎士を挑発する。

「準備はできたぜ、遠慮なく掛かつて来いよ！」

緑の騎士は笑いながらゆっくりと歩みをこちらに進めてくる。

「ふん！どんな事かと思えば剣の数で勝とうなど片腹痛い」

「やってみないとわかんないだろ！ ああこう言う時は騎士風に言うなら『臆したか?!』か」

緑の騎士は愚弄され、憤慨し剣を振り上げるとクロウに襲い掛かる。

まずは一本剣を引き抜くと、緑の騎士の剣を受け止める。次に瞬間剣は弾かれクロウの手から吹き飛んで言った。緑の騎士の剣はクロウの左腕があつた場所を翳めてゆく。

瞬時に右足で二本目をすくいあげ手に取ると緑の騎士の胸を打ち抜く。しかし鎧に傷を付けるのが精一杯だった。最初から解つてたが切れ味が無さ過ぎなんだよ、西洋の剣つてのは・・・そう思いながら、二本目の剣を緑の騎士の兜に向かい投げ放った。

緑の騎士は剣で兜をかばった。その隙を突き疾走すると、三本目の剣を取りそのまま心臓に向けて投げつけた。

すかさず四本目の剣を掴み取り三本目を投げた場所へ正確に投げつける。

三本目の剣が緑の騎士の鎧に傷を付けると間髪いれずに四本目の剣が突き刺さった。

それを見て緑の騎士は驚くと怒りを通り越し冷静になった様だった。

「なるほど、大した技量だ・・・人間なら死んでるだろうな、殺すには惜しい」

「お褒めに預かり光荣だな・・・」

あれでも駄目か！内心焦りながらもクロウはその言葉を待っていた。

「さて、そろそろ終幕だ」

「そう願いたいね・・・」

クロウは五本目の剣を引き抜くと、無謀にも緑の騎士に襲い掛か

る。

上段から繰り出されたクロウの剣を緑の騎士は片手で受け止めた。
「くそ！片手じゃ力が入らない！」

「当然だろう、だが敵にしては賞賛に値する。片手でよくぞここまで凌いだ」

そう述べたあと緑の騎士は渾身の力でクロウを斜めに切りつける。瞬時に左肩に剣先を乗せ、右手を上へ突き出すように防いだ。次の瞬間、剣は打ち砕かれた。

勢いよく後方に吹き飛ばされる。柱が体を受け止めてくれたみたいだった。

「もう、打つ手が無い・・・どうせ殺されるなら武士らしく頭を刎ねて殺してくれ・・・」

「いいだろう、貴様は敵ながら見事な腕前だった、敬意を称して望み通り殺してやる」

クロウは、右膝を付き顔を下に向ける、首目掛け緑の騎士の剣が振り下ろされる刹那

「位置に着いて用意、ドン！」とリズムをきった。

クロウは柱の傍にある甲冑に向かい全力疾走する。

緑の騎士の剣はクロウの首を捉えることができず空を切って硬い地面に叩きつけられた。

瞬時に甲冑が抱えている剣を引き抜くと、甲冑を足蹴に跳躍し柱に足をかけ飛び上がる。

緑の騎士は剣を引き抜こうと力を込めていた。クロウは緑の騎士の首目掛け全体重を乗せ力を込め剣を振り下ろした。

剣は金属音を立てながら緑の騎士の首を切り下ろした。

転がった兜から声が聞こえてくる。

「大した者だ、敵であり騙された私が言うのも可笑しな話だが、実に心地いい。貴公に一つ助言をしておくとしよう。『一年後』我と同じ死に方をするのは貴公の方だと忠告しておくとしよう。さら

ばだ強き者よ」

そう告げた後、緑の騎士は塵になり溶けていった。

「アンタ敵だったけど、憎めないな。そんな貴方に俺も敬意を評してこの剣を捧げよう」

クロウは緑の騎士が溶けて言った場所に剣を力一杯突き立てる。

「貴方の事は忘れない、誇り高き緑の騎士よ・・・」

踵を返すとクロウは柱に寄りかかり、疲弊した体を休ませる。

「はあ、疲れた！万策尽きたと演技するのも疲れるなあ・・・」

呟きながら呼吸を整えていると、先程剣を取り上げたある甲冑から呻き声が聞こえてくる。

「うー！うう！ううう！」

立ち上がり片手で甲冑の頭を取ると、金系の髪が溢れんばかりに沸いてきた。

「ヴェルフィーユ！？なんでこんな所にいるの？」

「うう！うううう！」

ヴェルフィーユの口には布が巻きつけられていた。布を取るとヴェルフィーユは怒り出す。

「クロウ、なんで私を足蹴にするのよ！甲冑なら他にもあるじゃない！」

「いや・・・なんでって言われても何となく気になったからかな・・・」

「もう！！でもクロウはどうして磔になったのが私じゃないって気づいたの？」

「なんだ・・・見たのか」

怒ってる様な、嬉しそうな顔で見つめてくるヴェルフィーユにクロウは告げた。

「だって、君は優しいからね、絶対そんな言葉は口にしないとわかってたから、妖精のおねーちゃん！」

ヴェルフィーユは嬉しそうな顔を見るとクロウを抱きしめる。

「いだだだだ！ヴェルフィーユ甲冑が刺さってる！！抱きしめるなら甲冑脱いで！」

「嫌よ！これは待たせた罰ゲームなんだから！」

そういうヴェルフィーユは顔を赤く染めていた。

二人が抱きしめ遭っていると、玉座に光が注ぎこむ。二人は寄り添いながら玉座に歩みだすと光の中へ入る。すると二人の体はゆっくりと宙に浮き空に登って行った。

/

クロウは甘い香りと共に目が覚めるとそこにはヴェルフィーユの顔があつた。

「俺が寝ている間、ずっと膝枕をしてくれたのか・・・」

どうやらヴェルフィーユは疲れて寝てしまつてる様だった。

今ならキスできるかな？と邪な思いに駆られたがすぐに掻き消した。男ならいつか自分で掴み取る物だ。しかし、クロウは困っていた。

「まいったなあ・・・俺が恋するなんて思わなかった」

そう呟くと暖かい体温を感じられる膝枕に体を戻し甘い香りに誘われ深い眠りに落ちていった。

クロウが寝入つたのを確認したヴェルフィーユはクロウを横に寝かせ毛布を掛けると、金糸の髪と共に顔を近づけクロウの口に接吻をした。

「おやすみなさい、クロウ好い夢を」

そう告げて光の粒となつて出て行った。

死者の復活（前書き）

感想、指摘など、気軽にご意見頂ければありがたいです。

この物語はフィクションであり、作者自身、初めて書く作品ですの
で読んで下さる皆さんの意見をお聞かせ下さい。厳しい指摘も歓迎
しております。

死者の復活

入り組んだ洞窟の中、薄暗い通路の両側に沿って蠟燭の灯りが点々通路を照らしている。

明かりを頼りに進んでいくとやがて木で出来た扉に突き当たる、黒いローブを纏った人物は片手に壺を手にし、扉の取っ手を掴むと部屋の中へ入っていった。

部屋の中は、木で出来た簡素な作りの長テーブルがあり、その上には髑髏や分厚い本や資料が山積みになされていた。

部屋の周囲を囲む様に、樹で出来た本棚にはびっしりと怪しげな本が、ひしめき合いながら並んでいる。

その横の棚には緑色の髑髏が並んでいる。髑髏は真つ二つに割れている。

「ほう・・・ヴェルティラックを倒したか。名のある騎士だったのだが奴をも退けたか・・・」

黒いフードを纏った人物は、興味深く髑髏に目を向ける。

「まあいい、替えはいくらでも手にはいる、だがそれくらい易々とやって貰わねばこちらの計画も破綻してしまうのでな、その為になんぞわざわざご足労頂いたわけだからな」

そう呟くと奥の部屋に向かい出した。そこには大きな長テーブルと大釜があった。

卓上には複数のうら若き乙女の亡骸が綺麗に横たわっている。持っていた壺を床に置き、卓上から亡骸を掴み取ると、骨を残し、短剣で肉を削いでいく。

ローブを纏った男は全身鮮血で染まっていた、その顔は罪の意識など全く感じさせない狂気に満ちた顔をしていた。

解体を終えるとブリキで出来たバケツに肉片を無造作に投げ入れた、そして大きな釜のある場所までゆくと肉片を投げ入れる、何度も繰り返す、釜が一杯になるまで続けられた。

そして釜にを火に掛け始めると、壺を持ってきて中に納められている、白い骨を投げ入れた。

「あとは煮詰めるだけか、いい余興になりそうだ。目的までまだ時間が掛かる、余興がなくては面白くないからな……最悪、奴が死んでもアレが手の内になればそれでいいだけの事……」
黒いフードの人物は邪悪な笑みを浮かべ、部屋を後にした。

キヤメロット城の地下の牢屋に囚われている青年は、余りの寒さで目が覚める。

歯は寒さで、カチカチと鳴り、震えていた。

「ううー……なんて寒いんだ。寝床が石だからか、ベットぐらい備えておいてくれよ……」

不満を呟きながら、クロウは昨晚の事を思い出していた。ヴェルフィーユ……君は何処から来て何処に帰るのか、ずっと傍にいてくれたらいいのにと柄にもない事を思っていた。

「……なんか胸がモヤモヤするなあ。これが恋って奴なのか、気になって仕方ない……」

頭を抱えながら毛布に包まると、あつちへゴロゴロ、そつちへゴロゴロしながらずっとヴェルフィーユの事を考えていた。他人がみたら馬鹿その者かもしれないなかつただろう。

突然、お腹がグウーと鳴り響く。

そつちや、昨日から何も食べてないなあと思ひ出し、立ち上がる
と鉄格子に向かい歩き出した。

クロウは鉄格子を掴むと大きな声で牢兵を呼ぶ。

「牢兵さーん！腹が空いたんだけど朝食とか出ないのかい？」

声は地下牢を響き渡り、牢兵に届くと一人の牢兵が息を切らせながら駆けてくる。

「御呼びでございますか？クロウ様！」

「うん、腹減ったんだけど朝食出ないの？」

「朝食でしたら、すぐに用意できます。係りの者に伝えてすぐに運ばせますので少々お待ち頂けますか」

満面の笑みでクロウはお礼を述べる。

「ありがとう」

牢兵は膝を付き頭を下げると急いで階段を駆け上がった。

その姿をみてかクロウは、牢兵つて職業も大変なんだなあと思っていた、こんな何処の馬の骨ともわからない若造に頭を下げ、敬意を払うのなんて嫌だろうに。

鉄格子から離れると、食事が運ばれてくるまでする事もないので、柔軟運動をする事にした。

暫く、運動をしてると、汗を掻きはじめてその内着ている、学生服が蒸れて肌に張り付き気持ち悪くなった。

そろそろ、着替えたい所だよなあと考えていると鉄格子の扉が開かれる音と共に、軽い足音が聞こえてくる。同時においしそうな香りも漂ってきた。

クロウは柔軟を止めて、鉄格子に歩み寄ると、朝食を持ってきた相手に驚いた。

「え・・・女の子・・・？」

長く伸びた栗色の髪に、碧い瞳をしている女の子は、実に可愛らしかった。

「クロウ様、朝食の方をお持ちしました！」

呆気にとられ、考え込むクロウの脳裏にはこういう場合大体がゴツイ兵士が持つてきて、ありがたく食べるんだな！とか捨て台詞を吐くのが相場な気がしてたからだった。

「クロウ様？」

名前を呼ばれ我に返ったクロウは慌てて言葉を返す。

「はい？」

女の子はクスクス笑いながら話しかけてくる。

「驚きました、ランスロット様達と引き分けた御方がこんなにも女性の様な顔立ちをしてらっしゃるなんて、ちよつと想像した御方とギャップがあり過ぎて思わず笑ってしまいました。もっと男らしいゴツゴツされた御方かと思ってたいたのですが」

そう言つと女の子は両膝を付き、鉄格子の隅にある小窓から食事を差し入れる。

食事は、魚を焼いた物に付け合わせでサラダとスープだった。

クロウは食事を受け取ると食べながら、話し掛ける。

「んーまあ顔立ちは持つて生まれたものだから、関係ないと思うけどね、好きで女みたいない顔してるわけじゃないからさ」

その言葉に、女の子は顔を青白く変えて非礼をお詫びする。

「お許し下さい！出すぎた真似を申しました！」

「いや怒ってないから謝らなくていいよ。この顔は俺の大切な人の面影を持つてるから気に入ってるんだ」

クロウの言葉を聞き、安堵し女の子はにっこりと微笑んだ。

「まだ君の名前を聞いてなかった、よかつたら教えてくれない？」

「私は、パーシヴァル様の侍女で食事係りを任された、リアと申します。これから毎日クロウ様の食事をお届けしますので以後お見知りおき下さいませ」

「うん。宜しくリア」

優しいような顔で微笑むリアを見てクロウは、ドキッとしてしまった。

さつきまでヴェルフィーユの事で頭を悩ませてた自分が、たったの一晚でこうも変わるのかと思うと少し罪悪感を感じた。

実は惚れやすいのか俺・・・そう思いながら食事を口に運び平らげた。

クロウが食べ終わるのを終始見ていたリアは関心していた。

「クロウ様は実に、魚を綺麗に食べるんですね、思わず見惚れてしまいました。」

「ああ、俺の国では当たり前な事だよ、魚を生で食べる事もあるしね」

「生で食べるのでございますか・・・!?」

「うん、新鮮でないと無理だけど、結構美味しいんだよ」

リアは驚いて硬直していた。

「まあ国が違えば文化も違うから、当然なんだけど・・・リア？」

「はいっ!!」

「言っておくけど、野蛮人ではないからね、俺をみたらわかるだろうっ?」

リアはクロウを見つめると顔を染めていた。

「そうですね。とても野蛮人には見えません・・・」

食事を終えてクロウは手を合わせ、ご馳走様でしたと頭を下げた。その姿を見てかリアが疑問を投げかけてくる。

「クロウ様、それはどういう儀式なのですか?」

「ああ、これ?これは命あるものを無駄にしない為の感謝の礼かな?元は魚にしても野菜にしても生きていた訳だから、その命を断つて自分の血肉にしてる事に対してのお礼だよ、食べ物粗末に扱うと神様から天罰が下るからね」

その言葉を聞いてリアは感激していた。

「クロウ様の国の思想はとても崇高なのですね、私達も食事の際に十字を切り感謝して頂くのと同じですね」

クロウは優しく笑い頷いた。そして空になった食器を鉄格子の子窓からリアへと手渡した。食器を受け取るとリアは立ち上がり「それではクロウ様、失礼致します」と言い出て行くこうとする。

クロウはリアを呼び引き止めた。

「リア、お願いがあるんだ!パーシヴァルに託けてほしい、俺が

いた場所に袋が落ちてなかったか探してほしいと伝えてもらいた
んだ！」

リアは振り返り頷くと去って行った。

リアは食堂に戻ると食器を片付けた後、宮廷の階段を上がりパー
シヴァルの部屋へと足を向ける。

ドアの前まで行き着き、扉をノックする。

「パーシヴァル様、侍女のリアで御座います、クロウ様から伝言
を承っています」

パーシヴァルは窓辺に立ち、静かに答える。

「入りなさい」

「失礼致します」

扉は開かれリアはパーシヴァルの前に膝を付くとクロウから託っ
た事を申し上げます。

「クロウ様が倒れていらっしやった場所に袋が落ちてなかったか、
探ってきて欲しいとの事です」

「そうか、なら早速私自ら出向こう、リア出立の準備をしてくれ
ないか」

「はい、パーシヴァル様」

そういうとパーシヴァルは鎧を身に纏う、リアは兵士に馬の用意
をさせる為部屋を出て行った。

その頃、洞窟の奥深くの部屋に黒いフードを被った人物は舞い戻
っていた。

大釜は、ようやく煮詰まり、釜の中には全裸の女がすっぽりと収
まっていた。

「そろそろ、頃合かと戻ってみればいい具合に出来ておるな・・・

」

そう呟くと床に魔方陣を描き、釜から女を抱え上げると魔方陣の中央に寝かせた。

漆黒の長い髪をしていて実に素晴らしいと黒いフードの人物は興奮した。

そして呪文を唱えだす。

「汝の主は我、汝は我を守る刃となり、時には盾と成れ！汝は我の僕なり！」*regeneration*」 呪文を唱えたあと魔方陣の頭上にドス黒い霧が天井を覆いつくす。やがて霧は女の口から体内に入り込むと消えて行った。

先程まで魔方陣の中央に寝ていた死体がゆっくりと瞳を開けると、そのまま起き上がる。

「なんと美しい・・・今までの最高傑作だ・・・」

そう言うのと漆黒のフードを纏った人物は服を投げつけ、着替えるように命令した。

「私を蘇らせたのは・・・貴方様ですか？」

「そうだ、私が今からお前の主だ、早速だがお前に頼みたい事がある、今からパーシヴァルと言う若者を葬ってもらおう。よいな」

女性は服に着替え終わると、黒いフードの人物に膝を付き頭を垂れる。

「主の意のままに・・・」

「お前にはそこにある赤い甲冑を身に着けてもらおうぞ、漆黒の髪に瞳では目立ちすぎるからな」

「はい・・・」

「では、狩りに出かけるでしょう」

/

パーシヴァルは城を出ると、城下を抜け、鬱蒼とした森を馬に乗りを走り抜ける。

クロウが落雷と共に倒れていた場所に到着すると、茂みの中に埋

もれた、見た事も無い袋が落ちていた。

「恐らくこれだな・・・しかし変わっている、すぐクロウ様に届けなければならぬな」

袋を手にすると、馬に戻り跨ると着た道を走り出す、小高い上り坂の上に赤い人影が見えた。

パーシヴァルは馬を止め、人影に向かい言い放った。

「何処の騎士か、今急いでいるのだ。其処を退いて頂きたい！」
赤い人影はその言葉を無視し剣を抜くとパーシヴァルに襲い掛かる。

「ちっ！面倒な事になった！」

すかさず馬を下りるとパーシヴァルは剣を抜き、赤い騎士に剣を向ける。

互いの剣は交差し、鏝迫り合いになる。

「何処の騎士だ！名乗りもせず剣を抜くなど騎士の風上にも置けん！」

「死に往く者に語る必要などないでしょう？」

パーシヴァルは声を聞き驚いた。

「貴女は、女性か！」

「女だと思つていると足元を救われますよ、パーシヴァル」

赤い騎士は剣を素早く引くと、パーシヴァルの体を崩す。

バランスを崩されたパーシヴァルに向かい赤い騎士は剣を振り下ろす。

素早く体を翻すと両手で剣の先端を持ち赤い騎士の剣を受け止める。

「何だと！これはクロウ様と同じ剣技ではないか！」

「これで終わりにしましょう・・・」

赤い騎士は距離を取ると剣を鞘に仕舞い込むと抜刀状態にはいる。パーシヴァルは素早く立ち上がると構える。

赤い騎士は目にも止まらぬ速さで疾走すると、パーシヴァルの間合いに入り真横に切りつけた。

パーシヴァルは右手に持った剣を瞬時に逆さまに持ち替えると右胸体を剣で庇った、すかさず左に携えていたダガーを引く抜くと、赤い騎士の首元に突き刺した。

パーシヴァルの剣は折れ、斬撃の勢いで吹き飛ばされる。

短刀を突き刺された赤い騎士は悲鳴をあげ、首から血しぶきをあげ絶命した。

「なんて・・・女だ、クロウ様と同じ剣技を使うとは。昨日のランスロット様とクロウ様の戦いをみてなければ真つ二つは確実だったな・・・」

「しかし、剣を盾にして尚、鎧を突き破るか、幸い傷は浅い。逸早くランスロット様に報告しなければ・・・」

素早く、馬に跨りパーシヴァルは城に戻って行った。

/

赤い騎士が倒れ絶命した場所に、黒いフードの人物は姿を現す。

「まあ目覚めて間もないところになるとは予想はしてたが、パーシヴァルを討ち取る寸前まで行った事は強大な力を秘めているのは間違いない。直に体と魂が同化すれば、相当使えるだろう・・・」

そう言うと黒いフードの男は再度呪文を唱え始めた。

「Regeneration」

赤い騎士は何事もなかった様に立ち上がると首からダガーを引き抜き、投げ捨てた。

傷口は一瞬で再生し何事もなかった様に、黒いフードの人物と共に霧の中へ姿を消して行った。

逢瀬と恋に落ちた貴婦人（前書き）

感想、指摘など、気軽にご意見頂ければありがたいです。

この物語はフィクションであり、作者自身、初めて書く作品ですの
で読んで下さる皆さんの意見をお聞かせ下さい。厳しい指摘も歓迎
しております。

逢瀬と恋に落ちた貴婦人

夕闇が迫る頃、王宮の一室に二人の人影があった、窓から差し込むオレンジ色の光は顔を映し出す。

その顔は互いに憂いに満ちた顔をしていた。

「グイネヴィア王妃、どうか私の願いを聞いて頂けないか」

「何故です・・・ランスロット。何故あの者を助けようとするのですか！」

ランスロットは、グイネヴィア王妃に近づくと抱きしめる。

「あの者は、才ある者です、このまま牢に閉じ込めておくのは国の損失になります・・・どうかアーサー王に進言して頂きたいのです」

グイネヴィアはランスロットの耳元で艶かしく囁く。

「解りました、アーサー王に進言しましょう。その代り今夜、私の寢所に来て下さい」

ランスロットは悲哀に満ちた瞳をし言葉を返した。

「わかりました・・・グイネヴィア王妃・・・」

グイネヴィアは、ランスロットを見つめると問いかける。

「ランスロット、何故、悲しげな瞳で、私を見つめるのです・・・」

「・・・いえ何でも無いのです。夢の事を思い出してしまっただけの事です」

「そうですか、なら良いのですが、余り無理をなさらないで下さい。私はもう貴方なしでは生きてゆけないのですから」

グイネヴィアは、そう呟くとランスロットを優しく抱きしめた。

抱きしめられているランスロットは、城内が騒がしくなっている事に気がついた。

「グイネヴィア王妃、どうやら城内で何か遭った様です。今夜、
寝所でお待ちしておいてください。必ず伺いますので」

そう告げたランスロットは踵を返し扉の外へ向かう、グイネヴィ
アは静かに頷くと、ランスロットの背中を愛おしそうに見送った。

/

グイネヴィアとランスロットが逢瀬をしていた少し前、パーシヴ
アルはどうにか城に着く。

パーシヴアルの脇腹から血がポタポタと伝い落ちる姿を見た兵士
は、急いで開門し、馬から下ろすと担架に寝かせ城内に運び入れる。
城内に運び入れると、すぐに異変に気が付いた侍女のリアはパー
シヴアルへ駆け寄る。

「パーシヴアル様、死なないで下さい！どうかお気を確かに！」
その姿を見て、パーシヴアルは、困った娘だと複雑な顔で微笑す
る。

「安心しなさい、死にはしない。それよりこの袋をクロウ様に届
けてくれないか？リア」

「わかりました！必ずお渡しします！！」

パーシヴアルは安堵し意識が遠のいた。そして自室に運ばれてい
った。

王宮から降りてきたランスロットは、城内の騒動について侍女を
捕まると抱き寄せた。

「マドモアゼル、一体何があったのだ！教えてくれないか？」

侍女は余りの出来事で慌てふためく、目の前には黒髪をなびかせ、
憂いに満ちた碧瞳で自分を見つめるランスロット卿がいた為だった。

余りの美貌に心臓が鼓動を速め破れそうになったのだ。

「あのっ……パーシヴアル様が、怪我をなされて戻られて……
自室に運ばれて……行きました……」

詰まりながら懸命に声を絞り出し終わると、侍女は腰が砕けてしまった。

その様子を見てランスロットは、兵士を呼び寄せると丁寧に介抱するように託けてパーシヴァルの自室へ急ぎ向かった。

パーシヴァルの自室に辿りつくと、勢いよく扉を開けパーシヴァルに歩みだそうとした。

「パーシヴァル!!」

次の瞬間、ランスロットは顔が凍りついた。そこにはケイ卿がいた為だった。

「ランスロット卿、騒がしいにも程がありますよ」

「・・・申し訳ない・・・パーシヴァルが怪我をしたと伺った物で・・・ね」

「死に至るような傷じゃありません、今縫合している最中なので静かにしていて貰えませんか」

「それで、パーシヴァルの容態はどうなのですか？ケイ卿・・・」

「今は気を失って眠っています、縫合するには丁度よかったです」

「そうですね、ケイ卿、パーシヴァルをお願いします・・・」

「言われなくともわかっています。先程もガウエイン卿が勢いよく来られましたが邪魔になるので追いつ返しましたが」

ランスロットは安心すると、パーシヴァルをケイ卿に任せて出て行った。

自室に向かい、歩き出すと大広間から声が聞こえてきた。

「あの、女狐め！何だあの口の聞き方わ！もう少し可愛くなれぬのか!」

ランスロットは声の主に話しか掛ける。

「ガウエインどうした？何を怒っている？」

振り返りランスロットを見るや否や、ガウエインは詰め寄ってきた。

「ランスロット！お前は腹が立たないのか！ケイ卿の態度に！なんだあの見下す態度は!」

「いやアレはそういう性格なのだ、仕方ないではないか。アレほどの美貌と知識を兼ね揃えているのだ仕方あるまい？」

ランスロットがそう言うのとガウエインは憤慨する。

「だから男が出来ぬのだ！アレで可愛らしかったらそれはそれで・
・怖いかも知れぬ・・・」

「だろう？まあかく言う私も苦手ではあるのだがな・・・貴公の事は言えぬな」

二人が笑って話していると、後ろから殺意が漂ってきた。恐る恐る振り向くとそこには、銀色の長い髪を左肩で結わえた。薄翠の瞳に、眼鏡を掛けた人物が、袋を一指し指でくるくると回しながら冷ややかな眼で見つめていた。

「ケイ卿・・・パーシヴァルの容態はいかがでした・・・？」

「今は良く眠ってます、明日には目が覚めるでしょう。後の事は侍女のリアに任せました。で、お二人は何の話をしてらしているのかしら？」

ランスロットとガウエインは二人揃って、静かにその場を足早に逃げ出した。

互いに大広間を抜け、一目散にガウエインの部屋に逃げ込むと大きく息を吸い込んだ。

「死ぬかと思っただわい！」

「まっただわい・・・寿命が縮まるかと思っただ」

双方顔を見合わせると笑い出す、声を揃えて言い合った。

「アレでは男を捕まえるのは無理だな！」
「アレでは無理じゃろうな！」

ランスロットが窓辺に目を向けると、日が暮れ外は暗闇に包まれていた。

王妃との約束を思い出したランスロットは、自室に戻ろうと足を向ける。

「どうじゃ？一杯やっていかぬか、ランスロット？」

「すまん、ガウエイン今日は用事があったな。そろそろ戻らねば

ならぬ」

「そうか、では次回にするかの！女狐に見つからぬように部屋に戻る」といいがな！」

笑うガウエインに背を向け、ランスロットは軽く手をあげ出て行った、その瞳は憂いに満ちていた。

/

ランスロットとガウエインが一目散に逃げ出した後、銀髪の美女は、リアから頼まれた袋を携え、夕食を持ち地下牢へと歩みを進めていた。

侍女達が制止したが、ケイ自体見ておきたかったのだ。宮廷に噂される円卓の騎士二人と渡り合った、漆黒の瞳をした不吉な人物に自らも円卓に名を連ねる者としては、純粋に興味があつたからだった。

壁に沿って両側に蝋燭の明かりが薄暗い道を照らし出している。

ケイは階段を降りて行くと、鉄格子の前に牢兵が立っていた。

牢兵はケイに気づくと片膝を付き頭を垂れる。

「ケイ卿。この様な所に御用で御座いますか？」

「今すぐに鍵を開けなさい！」

牢兵の手によって牢屋への鉄格子の扉が開かれる、中に入ると漆黒の者と噂される人物の元へ歩みを進める。

カツカツカと小刻みに靴音を鳴らしながら歩みを進めると突き当たりには微かに蝋燭の光に照らし出されている牢屋が目にはいる。

あそこにいる人物、それが円卓の騎士を退けた漆黒の者か、ケイは不安に駆られながら恐る恐る近づくとそこには、一人の青年が片膝を抱え壁を背に寝ていた。月明かりが青年を浮かび上がらす。

その姿を見たケイは一瞬で心を奪われた。

なんとも形容しがたい今までどんな人物にも感じた事の無い独特の雰囲気を感じ出した青年に。

今まで体験した事の無い速さで胸が高鳴る。

青年は人の気配を感じて静かに目を覚ます。ケイに向かい顔を向けると話し掛ける。

「こんばんわ、夜はリアじゃないんですね？」

ケイは、珍しく当惑した。

「ええ・・・侍女の代理で夕食を持つて来ました・・・」

「そうですね、もう夕食の時間ですか？いつの間にか眠っていたので気づきませんでした」

真直ぐケイを見つめる青年の目をみて素直に言葉が零れ出す。

「綺麗な瞳・・・」

その言葉に青年は嬉しそうに言葉を返す。

「貴女のその銀髪も凄く綺麗です、眼鏡も良くお似合いです」

ケイは頬を桜色に染め俯いてお礼を述べる。

「ありがとうございます・・・」

膝を付き鉄格子の隅の小窓から食事を差し出すと、リアから頼まれた袋も一緒に差し入れた。

青年は袋を見ると喜んで御礼を述べる。

「ありがとうございます！私はクロウと言います、貴女の名前を伺いたいのですが聞かせてもらえますか？」

「クロウ様、私はケイと言います」

ケイは終始俯いていた、目を合わせてもらえないからだ。

「ではケイ、パーシヴァルとリアにお礼を伝えていただけませんか？こんな状況なので自ら赴く事が叶わないので、貴女には失礼だと思いますが、どうか二人にありがとうと伝えて欲しいのです」

「わかりました、伝えておきます・・・」

そう呟くとケイは走り去って行った。

鉄格子の扉を潜り抜け、全速力で自室に戻って、初めて冷静さを取り戻すと呟く。

「地下牢には・・・本当に美しい怪物がいたわ、何だろこの気持ち・・・」

ケイから溜息が紡ぎだされる。
自分の気持ちが理解できないまま、その晩は過ぎて行った。

/

深夜、皆が寝静まった時刻、王宮のとある寢所に向かうランス
ロットの姿がそこにあった。

その顔はやはり、憂いに満ちていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0430y/>

封印聖女

2011年12月2日16時36分発行